賀茂社記録

十

832
97
305

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』　請求記号 832-305

ガラス使用

競馬異例

832
97
305

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』　請求記号 832-305

ガラス使用

競馬聞書

同弓場内ニテ之事
正文式

一馬番立ハ湯屋内東ハ左馬西ハ右馬内メトハ東
南左弓ハ右ノ之社内ニ残ス
一サカ石橋左ハ辰巳ヨリ戌亥ヘ廻ス又右ハ丑寅
ヨリ未申ヘ廻ス何モ戌亥艮ニ向テ引ムケ向
一番ニ右外ハ東ハ右馬西ハ右弓之キリ芝之一当左
又右モ西之次第ニ之左乗尻ノアトニ左弓引又
アトニ右弓引又其ハアトニ右ノ乗尻乗ル御幣
ノ後左右共ニ新宮石前ヨリホリ石橋ヘ廻ル
一弓場東ハ又東左弓西右弓向ニ一当馬何モ

帝國圖書館藏
正 7.2.2 購求

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

立ヨウチノ内（ラカ）溜ニテ左小ニ一番又右モ小ニ一番
乗ハ馬ヨリ立ヨ
一一番ノ競馬ハ左ヨリ馬ヲ入ヨ二番ハ右ヨリ馬ヲ
入ヨ三番ヨリ勝負ニヨリテ子タム方ヨリ馬
ヲ入ヨ又十番ノ競馬ハ左ヨリ馬ヲ入ヨ
一上五番マテ三十アリ上ノ番ヨリハアフミスリ
ハカリ
一勝負ハアラソイハロクノ綃カニラ又マテヘノ物ニロク
シ押ヘヨ但又ツヽミシノヨリ下ヘ内ノ馬ノムチシ
ヨリノ見ヨ

一此馬何ニテモカハレハ一番右勝負乗ニ一番左上
馬勝負ノ乗カヘハ祢宜方馬ニ乗物ニ祝方
馬ヲハ乗セ又物ニ一番左ハムチシサヽス又右
ハ初ヨリムチシ不上ニ馬ヲ出シカケヨ
一階下ノ松五本ハ此尻ヘ此ナヨリアリテ立サセヨ又
七番己ニノ松シナス也
清茂追勘ホコ再具ハナキ前ハ松ヲ立ル
一階下使ニ取ヨ左文別當左文目代ニテモ乗尻
ヘ行時先其ハモノ浄衣着シヨヒテ申也別
乗尻ハ床几ヨリ下ヨ左様ニナリノハ申サヌ也

一 競馬装束次第
一番奉追手ニ、セヒフ三ニ赤カケ四ニ御袍
五ニ襷六ニクヒカミ七ニ御身八ニ太刀九ニカ
ムリ
五日ニ雨日別当ヨリ蔵アニナレハ雨日上ニナヲル事
一 将々数東弐百廿五本 西弐百拾九本
一 階下着座五日ハ別当大夫雨日代大夫
ル但雨日大夫別当ヨリ蔵アニナレハ雨日上
ニナヲル弘治三年ニ近江守雨日ニテ上ニナ
ヲルヽ但朔日ハ別当大夫両座ニナヲル
一 雨溜ハ左右共ニ馬場末ヨリ朔日足洗ノコ
トノ馬ヲ上ル御雨屋西ノ新ニテロリノカハル事アリ
天文十五年午戌雨日態手代大夫氏頼代兵
部大輔竟平之時山本民部丞氏茂奚見
ニテ昔モ如此アリトテ此歳ヨリ初ルヽ社務
竹内三位明父ヽヽ
一 朔日無事尾ハ御雨屋当ハシラトヨリハ社務、
御礼西ノ切廿之ハ雨日大夫へ見セシヒテンノタメニ
礼ニテハナシ
五日ニ御ちカハル時届雨ヽ事
一 五日ニ御ちカハレハ先ち雨ヨリ子シ雨へ案内アリ
又子シ雨方ヨリ古人無事尾ト雨日へ案内アル
国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

一　おし下ケ可申候も楽屋ニ而ハラリノ待カヨキ也
一　楽屋流装束次第
一番ニカフリさへおりめをかるしかるよ
二ゝに下たんなみをのこひて則かく
三ゝ流袖をときよ
四ゝたもとまさ紐は肩へこしおうへをと切して
たゝしさ紐はかきこそ後上をよくしめよ
五ゝ足ゝ袴をもくかゝりまでよくしめよ
六ゝうちらけわき紐むすふ
七ゝせひをむすふ

八ゝ右方をとく
九ゝひんをかくかみきよ
十ゝおいうけよくうけよ
十一ゝ袖乃くてとよくゆふ
十二ゝ小袖ていてもちをうけよ
一　流袖をひ次第
一かちくり三さかつき　二ひらひは三
三尺ゆはは三　おいかる志めをいそき
へ補給といふて
一　流袖のり二くれよし

一 御身のぬけ口ゆるさずして左右共に右は御袖ハ
あとさき三寸斗と入よ　つまひのまゝ）御袖
下つのさけ一丈三まよし御袖くゝりまで入
ひらとよくとりて後御身よ佐けよ
已上されしとかくあゆみの後の世残り外よ
仰されよといふべし

五月五日競馬

天文十三年ノ初乗三人
一番左式部少輔隆父　三ヽ右兵部少輔堯平
五ヽ左藤原式文保賢（勇カ）

同十五年
（両説有　兼尻左右共御下知ニ依テ如此之事）
所司大夫熊千代大夫氏頼代兵部少輔堯平大雨
降　左右共ニ馬場末ヨリ朝日ノ本ノサラヘテ上ル（馬ヲ東ノ方ヘイニ）
御所屋西ノ新ニテ口ノシカクル近年ニ初之（例）
山本民部丞氏茂呉見ニテ昔モ如此アリト
テ如此之

清古記云終日大雨紙屋左右共ニ御所屋へ
参籠ノ床ル二尻ヲカクルヽ北条先例有之
両能千代丸又氏頼　目代甲斐守国氏父子希
代也云々
（両目代父子初年）

同十六年
天下一乱ニテ馬ナシ於是上意ニヨリ作ラ十疋
ヲ召ヘ借シ下シ上ノ作ラルハ無業又里思ヒ下サルヽ志
私云知久作ニ乗ル又ハ飼ハノ内ル
ヒリヲ立山本氏ア遊氏茂乗ル東山白河
城ヨリ被借下シ　社務竹内三位
（将軍義輝卿）
（明久卿）

同十七年
福田庄供馬昼ル一番右勝負ニ不乗ニ而富之

同十八年
（左方勝ト初年　右方勝ト昼初年）
社務竹内三位也子ニ不役右衛門守安久龍竹内
之子息但シサナキニヨリテ志ニ伊守龍ヘカハリテ
ツトミシヤウコ役アリ同播守肩テ里ニテノ供馬屋
ヘキリコム松下ヲ見シ兵ハ庭ノ武役一而ミツナノ喧
嘩アリテノ其ハサイクワニ因幡守三年競馬ニセ
カル、
（同播守肩テ里ニテ不法有シ故競馬三年セカル、事）

清古記云天文十八年森賀久為武士矢嶋被
害于時森相続之仁忽断絶之間尊久氏へ申、
（尊久森家相続之事）

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

懇望候者之森跡相續也右件恩賞豊前祢
祢宜祝之馬ヲ以尊久競馬ニ被乞也云々

同十九年
社務竹内明久階下正祢宜杉下三郎同座アリ　敦久ヨリ
上様御他界アリ腰長庄御馬竹ノ原ノ御一乃カ
化ル筈ナカノ出ルニ一番ノ右乗
朱書　一本云今年五月四日義晴甍號萬松院
然共如件競馬有之
萬松院殿ハ義晴御他界ノ然共ハ競馬有之事

同廿年
社務竹内三位明久以階下杉下若座アリ

同廿一年
社務竹内三位明久以階下参并祝出人若座
アリ御成（公方義輝）條叶之競馬三番アリ
御浅黄右ノラチ勝負末ノ前ニ長さ十尺廣さ
一間懸中用意之御屏風上ヨリ魚同御てノ任始
宇多ヨリ魚御池子懸中ヨリ魚翔カ五間ほとカ
吾ニ御成何も同之御於吾今御所入之タイ之五日ニハ
麻カメ杉之今御手一年此餘二ツ條件ヨ魚
翔カ御太刀有銘懸中ハ上下上ハ御礼竹内森
御太刀ニテ魚氏人中ヨリ遂行季孔之孔ニ太

公方義輝御成御下乗場之事

刀禰方ハ何モ出礼有之此馬ニハ十一乗等ノ年
又キヨリ五間バカリ西ニテ御下アリ又ノカシキ
ヨニハさる事もなし而所在西ニテ御馬ニ御忘

同廿二年

御成五日午ノ時御参候五月ノ下ニイタシ候日カ
ゾヒナシ松山若成御ケイコ御テウシ数中ヨリ
乗大笠ニ付テ所ヲハリモテ出打三ヶ度大笠
有ヨリ乗数中ニハ三ヶ度目出騎射ニ競
馬三当之

氏根朔日重服明乗馬之事

朱注
六番右近将監氏根　朔日重服明被乗之

寛文元年庸顕ハシフクノ時被書出也

同廿三年

土田左ノ馬カハル一当右勝負ニ来朔日ニ倭文
庄但馬守氏信乗カヘサセスアヤマチナキニヨリテ
如此之

同廿四年　十月廿三日改元為弘治元

御馬ニ走カハル一当ノ左右ともニノラス但後ニ勝負
ニハノル朔日ニ三番ツカイテスクニ馬トシルアスカイ
是従之人見物ところなり之

弘治二年

権禰宜ニテカハル一番右ハ十番ニ馬借リテ
一所ニ打寄テ見物シヤウチ院ニテカリテ
乗替ノ中事アリ

十番

左　在憲大夫　前除　前駆トアリ前年カハル

右　治部少輔季貞

朱云
一本云兼賢季貞ノ馬ノ相論有テ此足
ノ馬皆借ル然ル見物ノ馬ヲ借リテ相
調ル之

同三年

社務松下　親久〔規久〕大夫　近江守代　兵部少輔
堯平　同代　伊賀守代　備前守　朔日五日左ニ
天気ニ　右ハ社務朔館ニ下司目禁府衆
（朱）右神主方朔館ニ下司目代堯平禁府方ニテ勤事
ニテ非在伴ノ不審并ニ着座下司目兵
也一番二番別当大夫三番同代別当大夫
一疋ト不審

永禄元年　弘治四年二月廿八日改元
又永禄元

（朱）当社百姓馬不出社家ヨリ出之借リ一疋不出事
依一乱ニテ十疋館留ル当家ニテ六疋出之但
百姓馬不出福満大夫ニテ右京亮ニテ大馬助
馬助守馬　精進院ニテ清福大夫　馬

おし当年ハ是はまり番とるのかり右りに出合之
置文なし　九番右　縣主能久直勝負ノ事之　下上附馬
南へ引つきとどひこ御うやりて落らありと
いへたらは所かりす　桂飛ら　七番ノ左　氏友　業落
七番ノ左氏友落らえ馬之にけし十番をそて弓場へ向事
馬よりえにけして十番をそて弓場へ
うけ入らいかきとどひこ御うるのかう伊
勢守十郎左衛門之　小寮ト云　出雲守氏
友業落ら後之　弓場ニ喧嘩アリ二東帰一人
そあまり注進ありの

永禄二年

一　五方様ハ成朝日斗之　下略
一　河をこいせんらんの水ハ安志まれ三ま乗ヲ当年
　ハ以ま乗ル不当之
一　一番ノ左右ノ御幣こあるり不当之
　一番左雅楽助兼久
一　右ノ御幣ヨリ代官元まで氏アサ甫安久又兄
　ざまでこあるりアリ世るり之
一　一番ノ右ノ馬ヨ右ノらちへハひらて頓下ル枚ノ下
　へひきて河へ入るりこ不当之

永禄三年

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

十番右
隆躬を弘延親しかくとあきてやりて兼し

七番左
大膳亮季懐ニ手ノうちをおいてむちを
うちて落るを法ニミるニ文乗るとする

（朱）預別當乗馬ヲ放チシ事

不審執ニ及ましく誤文内蔵助氏起乗るす
あすく別當許りさせするにいく朝日に法かののち

（朱）朝日童治ニるさるをにたそ一事并ニ落ちし後不乗馬持内引上事并切芝ハ
（朱）他馬ヲ借ちて

蔵人補を流一るさるをに南へ引一気乗え
落るを其馬ヲうちのうちを引る上ミハ不乗
切芝ハ山城守ニるを代ニ宿之

（朱）保國廃之忘 右之ニ因事

朝り上擬ハ成様の丁中宮
和泉右ち保國ニ廃を忘て廃なりて止ミ元ニも

とするりアリ

（朱）弘延朔日童胎明乗る之事

弘延朔日童胎明被乗由寛文元内蔵人ハシアリ
吟味之時膚乳ヨリノ例書ニ出ル童胎ト惟胎トハ
有稽之

七番
左 大膳亮季條
右 兵部丞継直 上右
近馬之

永禄四年

馬場屋ノまへおそとく　おはしまし十番より出し
てさる程ち此南ニおくを一番ノ左とりのう
ますいおしゆや乃けや未乃ト三立るす不審

祢人両代赤大夫左近将監両人へし
朔日に両人御成 中興 除時ノ競馬一番ア
りまけられかし

此神料之事

此歳より此神料壱貫五百文まに定之備
中宇左近ヲ定テ鹿屋ニテたくし一番左と 六番右季継

左カラ定テ鹿屋ニテハクヲ

りう上ノ此ら かまりてやろうんうけお上ら
八一番左法ア右衛知文業 二番ニ摂津守来初業 能賢
あいてえのまゝうつちより勝負去

二番 左 摂津守能賢
右 初千代大夫持久

永禄五年

佐々木四郎左次郎左見物之日酉刻中より
余馬二疋かちらし一番左方足去ニ不乗木法り
いし神料一貫五百文之 十番左朔日ノあん
法らいよ来十番法らいよ立ろうと九番よ右
摂津守兼賢ノ川上乗 右對馬守馬を立之
中宮アり能左兵ろうし

九番左兼賢十番之馬ノ川上乗事

九番 左 兼枝守兼賢 條人
右 對馬守季員

永禄六年

国立国会図書館 タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

左衛門尉保敏朔日当座三井寺光定院
馬式部附右衛門保泉乗かゑりの中事アリ
社務階下ニ立退て当座の中の乗共云事

一永禄七年

三方様より馬并足そろへかしら之事

一番右 大藤右衛門重治
馬引ニ落ると式部右衛門右らちの外
おつると左京大夫うけりと 三方様より馬
ふ足そろへかしらにかいぐりのしけつこうなる
次第之翔の右の兵によるあるは感し 下略

五番 左 式部右衛門 保泉 厩
右 左京大夫 増敗
退く

一永禄八年
朱書
一未云此年将軍義輝為三好修理大夫長慶
被害

一永禄十二年

一番 左 治部右衛門知久
右 越前守祐平
七十才 十人宿老之内

祐平十老之第事
初乗安氏之代之兄尚秋乗事

六番 左 掃部助尚秋
初治理亀さしはさみ力中ニテ不之代兄乗なり
右 治部少輔氏頼

修理亮安顕初番ニ法ヘ進ミテ法ヘ下
テ來ル同名亮昌晃トシテ代ニ埒アル（アケナリ）
尚朝乗之大雨コウ水出テカハカル程ニ渡
法服屋ニ來ル 乗尻モ同之法ニ西ノ新ニ入ル
日ロクモ一西新ニテノカクスル 右ハ右方ニテノカク
法之乗尻出テ貴布禰祭九日ニ來ルシコフル

（朱）大雨洪水ニテ埒下乗尻ニ定 九分屋ニ來ル也
（朱）洪水ニ付六日貴布禰祭九日ニ被行

故ニ式無例

朱書
一本云 朔日五日両日共雨降 六日之貴布禰
祭九日延引 此年義昭任征夷将軍

永禄十二年

朱書
節供ニ将軍義昭御成

元亀元年 永禄十三年四月廿三日改元
為元亀元

（朱）季継十歳

六番 右 七十一才十八人内之
備中守季継

左 民部少輔睦

備中守荒馬ニ民部少輔肉馬ヤカテ來ルもちも
あまさかに法くみをうつおきあひを
の法へすてうつよしやて 又備中守ろを
入テ二度以てうつ事を無例なくす

朱書
一本ニハ右手馬ノ肉荒馬三足有之 六番ノ左

ムナハシリノ時太鼓合色々穿鑿アレ此階下
ヨリ返事ニ氏方ホ不申ハ意共礫ニテウ
チ申由ニテ人置ニヲ塀ヘ入勝負アリヽし

信長殿見物し事

元亀三年
信長殿（織田）御見物し桟敷ニ方様ノ左くまヽハ
殊ちよいくらと悲くし出勅掛年より気まんち
うちもいちまちヽ気打ち会流弊右ハ一番
右ちといらヽく斗し上より御和事流ハ右
きりよ仍し登より前よりいのきし六番競馬
左ハあきちのうニ氏析先馬 右 初 荒紀内馬おそし
右ハ兵衆ちを文

ぬくるかちし信長様御前事ニよりて又乗し
候ハ勝負上らし侍らみニ成あるかし一陀の
御きげんりて万ちを出生ちを出く

五月両鹿…若虎ニ…

元亀四年 七月廿八日改元 号天正元
社務森氏父下野守久友家を保ち世代無テ
…荒紀季同代右ら元宗相五日両度出宗
屋へ仕らつりあるし若虎ニ以第一下野守文二
別当…文之同代 織田 会津虎出馬む
おらひ虎らひ冬きし是より去文初

天正二年

信長卿御参詣見物ニ出ラル事
五日

葵祭織田ゝゝ御見物あり 然中ヨリ
一献条々馬あり候ニ信長方ヨリ条一段か
いくけつこうにて三番ニ左中務大輔光秋 右兵部卿保朝あ
ふみをあげしにせらふありけることなやう
こなしかいからぬ丈ありて宗あらすめせと
あれとものちをとさ左中務大輔 頁 右兵庫
勝らるゝき例し

信長卿より御馬并走出ル事
朱云
一本云于時織田弾正忠平信長ヨリ御馬
并足出ル 内ニ足信長御馬也 一足ハ倭文ニ立
ツ 朔日ニ治部少輔氏頼ら乗ル 一足ハ新宮祢宜ニ

立ツ 宮内少輔保望ら乗ル 二番ヘ上ルレ 于時宗
内少輔妻筑後守氏慶之継服也 雖然朔日ニ
宮内少輔ら乗レ 此鞍皆異ハ新敷ヲ乗初
ニ社人ニ乗ヨトノ御諚ニテ大田又助為御奉行
ニテ被仰渡 此鐙ハ判官義経一ノ谷ニテツカイカケ鉄拐山鵯越ヲ
シ乗シトシ玉フ 秘ノ由也 五日ニ信長為御予
息ル チヤセン夏ル見物ニ御出ル 此息ニ付テ一

一番斗三遍残り乾ノ斗ゟ当事
番斗三遍ル馬残りハ秘ズリ斗ニテ 又三番ノ
ハ正鞍モツヽミモ不合ル 穿琴ノ内ニ四番ノ馬早
将ヘ入ゟ三当目中書貝ニ成シ 然ハ鞍モ合

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

中止之

天正四年

天氣上〻吉横川陣立ニテ川神事ノ急ニ付〻

より前ゟ迄川有之

朱書
一本云勝負未了迄ニテ左を支え落馬之但鞍

もろ〻へ其鞍不合迄ニテ又ら人も騎負ニ存有

之

天正十年

六番 左 淡路守氏利

右 初 左を支え充取

朱書
一本云今年六月二日信長為明智日向守被

弑同十三日明智野伏ニ被弑

天正十一年

二番 左 飛驒守久清

右 民部少輔将平 負

九番 左 若狭守兼賢

右 宮内少輔季持

勝負未了迄里ニ帰リテ死去之事

季持勝負未了迄里ニ帰リテ死去之

朱書
一本云久清将平勝負ノ未ノキワニテ双方落

勝負未ノキワニ行双方落馬左右名誉畢ヲ引出勝事

乗之安志ノ者ニ久清乗勝後本ヨリ上ヘ久清
シリ出ス乗ニ乗勝事也（虫損）

天正十二年
親王様御幸也（直久社務初年）経所南方二間程ニ打カヽル、下埒

天正十四年
當日之競馬若様完ニて馬呉おきし置出仕ニ
不及ね縄入之前ヨリ神人共ゟハ尻ツヽ行も
為し之好條七ヽ名出見物輩中ヨリ出純子
遣之

天正十五年

久之完五人弟子

一番　左　佐勢大輔俊久
　　　右　讃岐守春久
久五人弟子ノ内也
別字入ハクルシカラス
ト物コツハ完ソフ事アレ

二番　左　権今番久
　　　右　采女佐三久
律法ニ落馬　此番年
佐甚せし　但旧例ニ
乗之也

三番　左　駿河守信久夏
　　　右　佐渡守保数
不当ノ競乗之先馬駿河守ノ勝也尾落馬之
おひ馬佐渡守負也尾　又乗テカツノ分ニメ

上ル之すゝのゝミハかちあれ左落ラ三テ
渡ち早ラ乗勝ㇾ
勝負未ノ内ニテ双方落馬早ク（保数）乗ラ勝事
一ケ乙
一本云二人ナカラ勝負未ノ内ニテ落ラ之作

天正十八年

七番　左　紀伊守氏長　負
　　　右　造酒正季匡

氏長逐馬場ニテアトヨリ打落負事
七番競ラ紀伊守馬さちかくにてうへ行之又
造酒正季匡則打之志ゝ之ありて渡よ
紀伊守茂とりかへりし負ヲナル左上ヘ上て
後くをかゝへとすおさへてゝ後くをうけ
すさ時馬よりおりて里へ帰りを其ノ初
しラ鞍古史共ニ一院乃けつこりて直年
かやうの事無し関白殿東国出陣之
此節ニ西国武士京中出為ニ流志ニ
ら流の出ラ鞍之

文禄二年

五日ノ朝俄有故障ノ事ニ而延引
九番左初ニ氏郷並老母を行ニ出ニ一ノ母ノ為
流キヤウフクノ流乗ニ而延引ㇾ　右番右　内藤氏

實顕代左と云文先祖之事之　以之右遣酒正季
臣代琴文季祐之事之　氏ア座氏栄代内
藤御氏参之事之　儀女房亢ノ手ヤウワノニ并テカ
ル之

田中十郎左衛門競馬ノ勝ノ調進之事

文禄四年
生夫云
一本云　神氏ア座氏栄五日暁ニ母儀死去御代之事之
競馬ノ勝ノ宮内少輔保香之処ニテ田中十郎
左衛門へ調進之之
右競馬之時ノ従天文十一年至文禄
四年故傳家守秀祖以自筆書写訖

慶長二年
生夫云
一本云　当年荒馬共有リ荒ニラアルナハ一番ノ
右被乗之儀古法之　雖然一番之右不乗仍ニ
旧例ニ相違不乗ニ可尋例之　又云越前守并ニ
中ハ鉄扇ハ御祭ヨリ以前ニ一条様ヨリ江州
へ御出也ニハ下ハシ并ニハ儀者仕来候之然ハ
翌日モ二日モ御宿直十九人之　三日ノ御祈祷ニハモ
十九人ニ上ハ壱人不残ル之　ニ於二郷堂江老若ニ寄合
アリ参宮被御祓穢モ無之　自昔未如其例
事之　三日ノ夜四ツ時分ニ江州ヨリ鉄扇上リ

三日夜逸平江州ヨリ帰ニ乗ル之事

一条様ヨリ此女房衆老若多クシテ竟ニ〻ノ
役ニ〻侍但此等女房ハ内房ノ晦日ノ時分ニ礼
儀ニ〻秘ニテ先習一中出ニ〻ニ〻（天内房云因心
故先ツメニ〻ニし然ハ乗ル人ト云ハ善人ト云ア代
末ゆノ乃詫之

兼虎自十才二人乗尻勤初之事

慶長三年

一番　左　讃岐守春父

右　越前守逸平

始テ兼虎十才ヨリ二人乗尻勤之

来伝ニ自是前ハ不ノ有之

初乗一人本木船勝ニ之事

慶長六年

九番　左　初乗代ニテ勝教主

右　望月氏観ニ而見

私云此年初乗一人教主ノ外ニ

イニ右木船ノ勝ニ初乗廿又元一ニ勝中ヶ

一ニ今三人ニニテ勝之

保遐産所ノ内ニテ乗事

慶長七年

三番　左　山城守能長トテ左

右　新下野守保遐

産所ノ内ニテ乗

六番
左 氏能蒲成繁 朱云 一ニ母儀ノ師脈之筆之
右 長門守冨延 上テ右

慶長十八年
朱云 此年二月秀忠任内大臣家康任征夷大将軍

慶長十五年

四番
左 大隅守保章
右 常陸守因戩 負 上テ右

朱云 一本云代官元右階下忠三郎与ス又ハ右周防也
五日ノ酒十四日ノ晩ニ庭屋ニテ通事
于時五日ノ酒十四日ノ晩ニ庭屋ニテ通ル此子細ハ

常陸守先ヘ三ノ芝ヘ大隅守ハ一ノ馬常陸守
ヘ出シ候ハ落ヘ候トテ皆ノ待大隅守ヘ出シ勝
事然ニ常陸守ヘテニ来将ノ内ヘ引陶リ馬
上ケラレト庭屋ヘナヲリ一ノ事也同右元来外
見頗負ノ元ニ事ト候ハ左負ニテ庭屋ヘナヲル例
従昔無シ無ハ大隅守も陶り事と候ハとも仁
モアリ大隅ハ勝テ陶ル了有ノ家ハト念議
過ニ込子シジヨ方ノ酒モ不通社務下向ヘ候ハ
来尾ニ元モ皆ニ下向シ于時五日ノ酒十四日ニ通
りまし

従院御所様左右ヘ二具御奉納之事

慶長十六年

五月二日従院御所様競馬之装束冠緌太刀蝉尾袴左右之分二具御新調五月三日之晩ニ森尚父ハ（兼之）一番之乗尻左山城守能長右方備後守保総始テ着之五日ニ雨降飾ヨリ夕ニ及（済之）社務乗尻左右共ニ出小屋ニ着座也

社務并左右乗尻共雨ノ義故御小屋ニ着座之事

慶長十七年

乗伝ニ代官乗尻左権少輔与久右下総守此年大雨也左右共ニ御所ノ屋ヘ乗尻乗尻着座之

両義ニ付左右ニハ小屋ニ着座但先例乗尻草鞋ハ半ナカラ社務ハ礼ノ事

右ハ東方右ハ西方着座社務ヘ乗尻ハ礼ハ草鞋ハ半ナカラ上ヘアカリ左右共ニ礼有之天文十五年ノ例ニ一ヽカセテ也此其上往古ノ例有之

慶長十九年

一番　左　初岡備中守久松
　　　右　備後守保総

二番　左　下総守方久
　　　右　初式部丞保定　上テ右

初乗二人也諸事者人先年沙汰有之氏

初乗一人不足氏流ニ二人有之、

流ニ二人有之能者氏流ヨリ老若ヘ程リ

當番祢宜入用氏流ヨリ出事

無クテ當番祢宜ニ入用氏流中ヨリ出ル

一書ニ為有瀧之節白朝ヨリ當テテ西塔之

六日當番乗洪水出テ

明日六日洪水出テ乗尻當番祢宜諸

白石ヨリ遥拝シテ

白石之浮矢一書ヨリ昨拝（フレシカミ）下向之當番

當番ノ夜銭麻造ニテ為ル

祢ノ祝之義當日不應屋ニテ有之、能者同十七

日當番祢宜請取之祝義之酒者初乗

ヨリ出ル飯者之振舞之當番祢俊

人有之ハ初乗ヨリ送（ヤドヒ）下行有之有来テ又

事者此先年之事

奥書云

右競馬之次第従天文十一年到文禄四年

我等親秀範自筆之従文禄五年以来

刑部丞孝顕被記置畢

後ニ氏宣ニ改ム

甲氏叙源依懇望秀亮之被書写

不可有他見者也

慶長十九庚寅歳臘月中旬

考ルニ亮顕八十四才之時之

西池信濃守

亮顕 押判

右以氏純縣主家藏之本書写加一見訖

元禄十六歳正月日　従五位下賀茂縣主清茂

元和元年　五月五日競馬

慶長廿年七十三改元
為元和元

一番　左　因幡守久紀
　　　右　摂津守尭久

二番　左　下総守方久
　　　右　右兵衛尉保遐　上テ右

三番　左　兵庫助國久　下テ左
　　　右　式部大輔保好

一本一番之下ニ書テ云　如此之座　十手指テ老

若之評議ニテ如此座並ノ方ヘ根本ハ三ノ座
之外ハ雖無之料簡之節也

元和二年

一番 左 図書助父堯 初 板倉殿奉行ノ時ヨリ

右 山城守能長

四月十七日公方家康公御他界雖然御馬出ル事

此年四月十七日公方家康公御他界雖然
御奉行板倉殿ハ馬出ル又慶安四年四月
廿日ニ公方家光公御他界ニ時右ノ評議
座席中ニテ又吟味有之考出ス

元和八年

落馬死去ノ事 氏成

六番 左 淡路守氏成 落馬死去

右 遠江守貞顕

馬場末ニテ落馬即死往来田十五年
在所成之訴訟
雖有之不許也
ヨリノ三石当真力之
但天正十一年マテ持之
例トミエタリ

元和十年

一番 左 肥後守父高 禁裏ノ御馬也 尚丁

右 因幡守父紀

寛永六年

十番 左 長福大夫季信 負

右 民部大輔弘之 勝

弘之童服朔日ニ明五日ニ奉ル事

十番右ハ民部大輔弘之母ノ童服四月中ニテ朔明
キ五日ニ奉ル亦右十番馬朔日ニハ足ニ進キル

五日 禁裏御馬出十番右ニ之勝ヨリ

五日ニハ 禁裏ノ御馬大黒ト云早馬登ル
勝ル

十番ニ之馬登リ云々伍ノ勝事

重村記云寛永六年五月五日競馬会神主十
番之馬登リ候テ神主ヨリハ兎角ノ案内モナク候
処ニ氏人中被申候ハ十番之馬登リ候由ニ候処ニ
何トテ楽所方ヘモ其通案内ナキソト代官方ヘ
被問候処ニ代官方被申候ハ馬所ヨリ代官方
案内ノヘハ其時代官方ヨリ楽所方ヘ案内申候ニ
テ候由被申候代官方ヨリ馬所ヘ問ニ案内候例無之
由ニテ代官方ハ有無ノ方ても無之又社務ニも代官
方ヨリ問ニ不来候ヘハ兎角之事中々無沙汰ニテ
是モ有無ノ沙汰モナリ馬ノリ候テ神事ヲ勤之

頓宮拝之後神主ハ立ナカラ目礼ニテ勤事

又楽所方勝負過テ後馬場ニテ揖之事
前廳ハ神主ヘノ礼ノ心カト見ヘ候カ此年ヨリ西
ヘてハリテ此鋒ノ立砂之所ヨリ拝ニ神主ヘハ
立ナカラ目礼ニテ相済し
又神主ヨリ誦経クバラレ候処ニ前廳ハ印ノ神
主ニクバラセ候ヘリ此年ヨリ被官之百姓ニクバラ

セシ廷臣ノ中言外宣旨ス

寛永八年

(六之左)影顕(七之右)氏房(十之左)順直三人当年始テ竟若ノ許訟ニヨリ新参兄之代ニ雇申右三人ハ未初参ス 此時

飛乗初ル事

飛乗初テルス

寛永九年

私云
競馬如例年

正月廿四日台徳院殿御他界ノ事

室村記云寛永九年正月廿四日江戸ノ大御所御遠行ス奉申(秀忠公)台徳院殿武家中ニ為名代関目隼人正季久下向于江戸

私云季久ハ時之雑掌ス

寛永十一年

一番 左 肥後守久尚
右 兵庫助國久

一番左方假殿廿下ニテ落馬右方馬ヨリ下立事 但入幸ニスル

一番左肥後守久尚假殿廿下ニテ落馬右ハ馬ヨリ下立毎年ノ如クニ馬上ルス但今一度勝負アルヘキ事カ但勝負ナリ上ル時ハ右ノ馬ハ馳セススクニイヌルカヨキカト云説モアリ

寛永十二年

保遐十六人メ七十六才ニテ来事

二番左紀伊守保遐十六人メ七十六才ニテ

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

七番　左　左馬允利直（内蔵允為直初代）
右　隼人正季久　上右
九番　左　主馬助順直　負
右　内匠助氏展　勝

初乗之時古来兄弟ノ不乗事

右七番ノ左内蔵允為直初乗シ左馬允利直
代ニ被乗九番ノ左主馬助順直内蔵允兄
弟也初乗之時兄弟不乗事古来之例也
然者順直四月廿八日ニ江戸ヨリ上テ令供奉セ
ラルヽ也失念殊外非例也向後例ニ不可用之

寛永十四年
此年細川三斎之御馬出ル強馬之由沙汰有之
然ル処一段ト云暴ナル馬也朔日ニハ宮内大輔被乗
五日ニハ千松丈（保祐）被乗也土田ニ立ツ五日ニハ二番
ノ左ニ上ル

寛永十五年
四番　左　東市正保請　下テ左
右　大隅守成信　上右
（二人ナカラ乗越ル埒ニアタル双方ヘ引分ニハ一人乗越ル也　此例多シ）
乗尻之内二人越ル丁初ニ有之由ニ沙汰也雖然
不知人ニ云丁也双方ヘ引分ニハ二人越道理無之

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録．第10冊』　請求記号 832-305
ガラス使用

其故ニ例ガタシ

寛永十六年
私云此例尋常也
五番
左 内匠頭ニ雖 内匠助辰顕
右 若狭守氏利 馬出ニテ落テ負

寛永十七年
出口ニテ落馬 馬引カヘリ
馬ナキニヨツテ負也
二番
左 采女佑秀久 出口ニテ落馬馬引テカヘリ皆ノ才覚アリト雖モ馬ナクメ右斗跡ニ馳テ上ル 負

寛永十八年
右 刑部丞清吉

三番
左 甚三郎保木
右 大隅守成信 出口ニテ落テ負 上右

寛永十九年
七番
左 兵庫助成相
右 志摩ノ守季当 朔日條文ニ案落テ五日ニハ兄大炊助代ニ案仮殿ノ上ニテ落テ負
十番
左 辰千代丸季森 主ニ前ノ初案代 出口ニテ落テ負
右 右近大夫宗貞

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

于時天氣快晴朔日ニ菅宮御方御成奉行板倉
周防守殿御供御桟敷小短所西ニ立五日ニハ不御成

菅宮御成御見物之事

清茂按或記云寛永十九年五月一日五日兩日
儲居 後光明院行啓于賀茂社是為競馬御見
物路次経中大路到于一鳥居給御桟敷小経所
西第九中衍文之奉幣之儀式有御見物御座御籍
屋東之間

目代四月大廻ニ書付ハ後来馬不成事

正保元年

寛永廿一年十二月十六日改元 為正保元

此年兵庫助成相目代之四月大廻ニ正辞ト書付
テ御ハシリ失念ニテ十番而ノ第九請合テ御手[illegible]

及中指儀ニ不成ハ右指決定第九定之雖然目代
テ第ハ例無之故ニ上表之大廻ニ書付テハ不成ハ
可為無之トミエ

正保二年

二番 左 民部藤清玄
右 右馬允保貞

保祐三日輕服ニ成依之其之歴ニ替リ保化第乗リ之事

美濃守保祐三日ニ儀ニ輕服ナル其ノ歴ニ替テ右馬
允保化（貞後改化）テ乗ル清玄ヨリ一ニ雅下之無ハ仕先例
其後庭ヲ不改美濃守代トメテ乗ル浄衣着
テ第ハ例之朔日ニ着替渡リテカラハ代トメ

参宮被ニ不逢内ハ座ヲ役組直事

浄衣着テ乗之例ニ参宮ノ被ニ逢不申ハ内ハ
座ヲ改組並ナル也テ之為代ニ乗ル者也

慶安元年 正保五年二月十五日改元
為慶安元

一番
左 左衛門佐重信
右 伯耆守時久 下ノ塔末ニテ落テ
六日ノ朝死去

時久六日ノ朝死去之事

将顕朔日落馬ニテ二日ノ晩死去代ニ友直乗ル事

八番
左 但馬守将顕 朔日ニ落馬ニテ二日ノ晩死去 代刑部友直
乗ル
右 右衛門佐季定 下九

右乗尻伯耆守六日朝死去 但馬守将顕ハ朔
日ニ乗落テ二日ニ死去五日ニハ刑部大輔友直乗

時久将顕両人之跡ハ往来田十五年毛宛之事

ル両人ハ死去之方ハ自惣中往来田十五年毛
宛之前代未聞之儀

慶安四年

両年共階下并乗尻ニ奉幣御札屋ニテ有之事

階下奉幣御札屋ニテ有之乗尻廿人ナカラ
御札屋ニテ奉幣両儀也
右乗尻之内主税助三番ニ乗尻之無老兄
宮内少輔初乗之雖令代勤之初乗之時ハ兄

兄弟初乗之時兄ヲ弟ニ乗事不叶事

ヲ乗事不成ヨリ古来之法也老若一同
之評儀と以未代兄ヲ初乗之時乗事不成旨

罷文有之ニ主税助上表替ニ兵庫助成相ら立
候ら参し

九番　左　兵庫助成相
　　　右　下総和泉守代　右京進勇命　持　上右

十番　左　縫殿助氏辰　下右　落馬
　　　右　宮内少輔和泉守代　織部佑秀全

四月廿日　公方家光公御他界之事

此年四月廿日　公方家光公御他界無之故倉
周防守殿より　競馬延引仕可然由澄治ニ参より
ら仰付ニヨリ其ら状来　泰治ア方ヘ帰し相
談申し処ニ　又周防守ヨリ内志ニ少輔ヨリ泰治ア大
輔ハ状来　文云曰加様之御競馬延引之例も
有之候ら申ら由ノ帰之　先支例とも申上
周防守ヘ氣ハ有其ハ返事ニ治部ニ競馬有之
ニ付之ら神申ニ其ハ返事ニ故ニ付ん処ニ入夜
治ア方ら留ら返ら之　周防守ニ其詮競馬延
引無之例中ニ是つハ殊外機嫌悪敷ら迷惑申し
周防守申ニハ鬼角二条ヘハ例と候事二条
ヘ治部ニ可ら候ら申之ら二条ヘ返事ニ次
第ニ申一つ事之由ニ付何トモ不知候明早天ニ周防守へ

延引可申ニ付其方雑掌ヲ被返候處又二条
殿ハも其方ノ存分ニハ出入ノ方有之ト申内々ノ才覚
候て有之由承彩申而申ハ一味心共ニ候
候而明早天雑掌ヲ以テ候ニテも無之由申聞
其方へノ被返候得共ニ競馬ノ有之候ニ付先
此方ニハ諸役人ハ其旨申付ト返答致し候ノ
内ニ禮ヲ以テ存分被入候ノ外ハ主計頭被参周防守
へ此内證ノ存分ヲ被仰申処二条殿ハ周防守
殿ハ以返答有之如相ノ御諸社ノ祭礼延引ノ
事申候由ノ以返答候依之競馬ハ有之候併

周防守殿ハ不出之ト今度祭ハ延引其外諸
社ノ祭モ延引ノ方相多有之候雖然競馬有之
清茂按重村記曰慶安四年四月廿日大樹家光
公御他界ノ因茲五月朔日五日両日競馬之事
於有先例者可有延引旨自板倉周防守許
被申渡于社家雖然無先例之間許此旨之処
至四月廿日無御変判傳ヲ自周防守二条殿家
又旧記所見之瓺被尋問之間則将軍家御他
界之時神祭等被執行先例

将軍家大樹公御他界之時神祭等被執行例書之事

将軍家

長禄院殿

應永卅二年三月廿七日他界同年五月朔日

祈年穀奉幣被行之〻

萬松院殿

天文十九年五月四日他界同月廿日日吉之

祭如例之

公方家光公依御他界雨日之競馬依不延引事

右之通自二条殿書状被遣之雨日之競馬不

及延引之沙汰被執行之〻 但御奉行之御馬

同御他界ニ依テ於御馬者不被出候云々之輩者不出事

毎年雖被出之依件子細當年者於御馬

者不被出歟云々之輩者被出之〻

一番　左　筑後守重次　勝　一ゝ鳴未

　　　右　大膳進本久　負　川ヘ落馬

五日若依大雨左右衆尻之奉幣於内籍屋

有之〻

朔日有雨者足調延引之例之事

清茂又按五月朔日者非本式之神事故中古

者朔日有雨者二日被行之事所見之〻 親長記

文明十年五月一日雨下霖雨今日賀茂足調延

引依雨〻〻二日雨下時〻晴晩日依雨無賀茂

足調今日有之〻〻五日晴陰雨時〻下競馬如常

廃朝廃務之時両日之競馬可延引之例書之事

一 又廃朝廃務之時 賀茂社五月朔日五日競馬
延引之例 二水記云大永六丙戌年四月七日 後柏
原院崩御于時競馬延引六月十一日十五日競馬
有之考自大永六年至慶安四年百廿八年歟

慶安五年 九月十八日改元 為承應元

一番 左 筑後守重次 勝 日年行周防守代写
右 大膳進本久 負 荷写 西保備前守写

二番 左 大蔵丞周年 水野石見守写
右 美濃守保祐 持 荷写门上

三番 左 右近将監親父 勝 野中ニルイヤ写
右 但馬守清玄 負 荷写 水野石見守ヨリ 出羽守写

階下装束自女院御所被寄進之事

階下装束左右共ニ女院御所様ヨリ拝領則
当人共ニ着シ神前之奉幣
代官亮 左階下 采女佑代 玄蕃助 右階下 左京
進代丹波守

保昔妻儀ニ五旬ニ成乗馬不成事

右三番ノ競ニ可采女正保昔女中儀ニ母儀死去
五十日也女中 五十日ニテ被乗候例無之
之例無之候て遠慮可由評判而中村為也云々

御ニ右を拝覧ニ乗ル亦丹波守女中軽服三日ニ
明テ丹波守ニ乗ス可然ト八右衛門守ニ乗ス

嘉應二年

翌日素之ニテ損シ番ニ馬替事

翌日競馬五味備前守依此ニテ金津ニ立右馬允ニ
乗ル馬上ケサテニ大トクリノ（大ドングリノ木ノ）邊ヨリ下ニテ陽出西方把
セ桐ノ木ノ前ニテ一乃左ノ足ナヨリツカイニ替ルニ
テ乗ス可成ニ御代之事

嘉應三年

一番左 西市正（初代）（福久） 踏段ヨリ下ニテ乗ル其例無ス
乃ち次欤例無シ雖然翌日ニ相撲守老翁ノ評
義とし乗ル則是例ニテ西市正ニ乗ス但評
敗ニ乃ス可成

嘉應四年 四月十三日改元 為明暦元

五番
左 丹後守清長
右 主税助保重

十番
左 丹波守兼定
右（右馬助初代） 刑部大輔季芳

神主森理久 刑部大輔季芳 下略

保芳翌日ニ軽服之代故相撲守替ニ乗ス

右五番ノ右主税助保重翌日ニ軽服故相撲守替テ

顕元季元等座席ツカヘ使者被差遣事

之業也依為同座也
当年業尻之内預元三人并又季元有四人
座席ツカヘ之故其手組人自座席元以後可被
指替之中ニ入処ニ手中ゟ座席元種々申分
雖在之古法在之故手中之申分不被受則
預之元在之八周預ヲ除被替清（三宮左）在 季元（三々八）季

氏雅初代之仁構之年任古法可季芳兼馬之事

弘被除保（三之右）昔被替之故座次雖相乱之又当年
八右衛門尉氏雅初代在之故度々雖為寄合仁
構之故加様之時在不可指錯之業中古法
有之ト指決之時節季芳ヲ被究業也 在

後代為例書付置者也

奥書云
右明暦元年之亡父忠直書留給也然其
年十月廿一日病死了余（忠道長男隆直也）亦續其跡明暦二
年已後以主膳正季芳所持之本令書
写者也

明暦二年

三番 左 図書允保竹
右 雅楽助清香 落

保竹者伯父保化之名代也座席如此
故者保化二日夜宿直所ニテ墮様痛
肘股之浄衣着故其座ニテ兼之古法
之社例之

四番 左 兵部権少輔清邑
右 主税助保臺 吉匹 落

当年季一家指合也除季金而招清邑之

六番 左 淡路守氏守
右 木工允貞紀 初

如勝畢之故ノ入向社初乗落馬殊遅甚之
祖福久而赦負之故者左再向社
（左階下）

九番 左 大監物氏金
右 縫殿頭季弘 吉匹

当年保一家指合故除保氏而招氏金之

国立国会図書館 タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

階下　尤西市正福久
右主殿少允兼英　代官定之

鉦鼓并左右床几新調之事

當年鉦鼓新出来并階下左右床几同前之

冠老懸寄進之事

當年赤丹装後冠亦頭老懸亦具寄附之

鉦鼓并左右之臺従社中新造之

雜掌二番右保福　所司六位氏守　所司代九位氏金　皆并節供奉

尾之出所人嘶焉

朱傘寄進之事

當年朱傘三本天祐和尚寄進之則別當所司目代持之而着座之朱傘一可有御嗜旨

従社中付末尾皆追言不聞者之

明暦三年

社司上表并以一社之評保矩勤神主代事

當神主代氏人岡本玄蕃助保矩下略

旧冬之権祝職之申分并松下矩久林重副井関盛久依上表傳奏葉室大納言頼業卿被達上聞処之則為氏人中可相勤之旨蒙勅許之仰氏人中五官役代被勤并従旧冬保矩神主代以一社之評勤之之

社司上表之事権祝職之記之詳之

明暦四年

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

三番 左 福田馬 但馬守清玄
右 吉田馬 兵部丞保木 晏負ハ落馬失氣
如此替馬之旨清玄以下仕断而馬所ヘ参ヿ
神主雖又答ニ此後代官ニ宗ヘ無理而直ニ馬
所ノ仕者余ニ無例之ト答之理答之保木
以上仕而断代官中ト其旨如此トテ馬所ヘ理之
答云之云々
五番 左 主税助保基
右 民部少輔永顕 右ハ遅肖負準吉

此番吉匠去匠コフリ不足故不合竜首無ク
依着座下知而準十吉
十番 左 左京進勇命
右 保意初代 民部丞季心
左遅負ト見了仍ニ二鳥居ニテ自下之無此
負ト思自下就階下ト知而不負事
就階下ト知而準吉
一 万治三年
七番 左 兵庫允勇寛 於埒内落而負
右 豊前介水直 未落而依問評飛来 殊ニ忌三日之請浄衣着

右両馬之舞庭并勝負舞随位階等可記上
旨一社兼勅而捧馬皆筆役氏縄記而獻了

寛文元年 万治四年五月廿五日改元 寛文元

一番

左 保本初代 西市正福久 舞法不合之 依例力 持

右 但馬守清玄ゟ帰来ニテ前ゟ

依口取下知人之態居負事

六番

左 伯耆守周顕 依合声而独走而勝 下左

右 越後介氏孟 居負口取下知人 弘基態 下ニテ

七番

左 備前守氏信 早而勝

右 兵庫允勇寛 於極木内而落之仍負 上ニテ右

脱冠而負事

右方七匹負事

八番

左 末工助氏縄 早テ而勝 下左

右 豊前守水直 遅而而負脱冠而仍負 上ニテ

當年右方七匹負是之古今無例希代事ニテ

階下

左 沢田祝之 式部少輔清雄代 民部大輔季純

右 十藤之丈好野代 讃岐守久盛

朱書

清茂按寛文四年 被寄 社司廿一人之社職領尓来補任

雖社司勤代官役子細之事

職之人者辞往来田而領社職田也寛文四年
以往依無社職領補社職之人亦猶帯往来田故

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

雖社司又相勤代官役者也
依代官兼尾之許而入埒之事 鐙摺已両様之古
布理之古法當年再與満番不違評也 先改
評曰コラリノ役若上三番下一番ハ六古布理目ニ出
馬也 中六匹若三古布理目ニ出馬之旨首尾廿
無相違神妙之義也 ニ 當初乗人之違法
種々一旦被督聴座事 仍殊右方扇色精土
器之拵 仍嘲右方之負也 殊尤右要骨起近年
之様号并 明日川上祭幣之首尾巧督日之
辨人之吐言或心謗或異見皆初乗人参之乎

毎年早々依下向仕而不知其式之由也 仍係成詫
曰不識可閣也
庸顛依輕服之織而坐席再三推之庸又答曰
輕服無ハン服ト云雖為坐席評定中之下知是非
可勤之也 皆改使言違法也ト可案之歟
之可ト任幣閣也 未同心ナラハ 若可得佳参之御
意ト也 若可任幣由也 季芳所司時故委細有別
紙不詫也
七番右 兵庫允 兼寛兆義一社評定之中評曰 去年ハ料簡
無是非事 當年ハ各無思慮也 追付一社之

三日正忌ニ依ル
至多可有之上之故ハ五月三日 親正忌故神事
人不法往々散乱ニ以咄之為例記之

寛文三年
一番七曲以後三曲ニテ立之事
一社評曰一番七曲ニ立之以後ハ三曲可立之
今度依一社之評之由代官中両階参笠篭所ヘ
入来云内談記右仍朋胥六人評曰コフリ如
件上ハ可頼肝煎人為ト各入言則四日
始頼出口肝煎事
胥之季貴保董弘和保進ヘ以初棄使而粍
言何も同心之

寛文四年

左 内匠助清弘 前弓
二番
右 図書允保竹 勤幣 括手之
五番
左 右衛門尉文作歟 廿遅 指策
右 主水助氏縄 廿早 無答
但元答者両埒ヘ馳入テ則離双鐙故ニ去氏尨
右ハ窕策ニテ正中ヘ出直テ不後之故促出口
留足テ不直双鐙無其不落之 埒内ハ廿早
中ハ廿遅終ハ又進之 又予出仕策之事元ハ
第里所埒ヘ然ニテ以代テ求喬 是此

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

後鳥羽院ハ御筆ヲ以テ院ノ御細工人三河守
兼里搏写之殊好所ノ便ヲ以醍醐理正院ヨ
ハ加持之右氏縄之私記ニ在之

寛文五年

二番　左　縫殿允保福
　　　右　兵庫権亮清邑

左遠サ例而先駈ス去共不入直可為勝之旨
右ハ遠例与思而引替タリ仍而所教言依階下
料簡而不可負ハ多喇馬雖然事外大雨在之　末

五番　左　因幡守鎮顕
　　　右　木工助氏縄　上右

八番　左　大監物氏全
　　　右　縫殿頭季弘　上右

左負不可負直麁座事

八番左左負無ク従右所而入直又左負然ヲ直
麁座多喇馬後関連九番之双馬而自勝負
樹之邊走出如此之馬作匠事　希侍之由喇馬
右拔走無ハ合策故可力能処再言依所入
直又独走無ヲ左不可負仍遺憤之

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

九番 左 左京進兼命 下左

右 隼人正季容

左不落右未ニ而之落汚半身ニ而雖無陽中

一之吉所ヘ不取放事及三度再見是多ヘ

五日ニ季延八才ニテ勤所司代事

神主松下雅久別当兼延所司代季芳但沙汰

人故子息長鶴大夫季延為代年八才ニ而着座致

目代ニ清孟

階下 左 民部大輔季純

右 大学頭季相 自役ヘ

寛文五乙巳年競馬五日七番衆之乗尻人無之付

而若役会所ヘ被立社中ヘ訴詔有之所立相ノ

寄合ニハ沙汰人被露申処ニ衆評之上定宮云兎

角乗尻無人故加様ニ相定之 有之向後者乗

乗可有幾人ヘ房中時者二人上リ下リ有

女房重服之時家ヲ出テ乗馬軽服ニハ不苦其様事

之神事可被勤者也次将服之事ト重服之女房

之時家ヲ出テ被乗上ハ勿論軽服ハ軽キ事ヘ是又

心次第ニ可被召之旨定置ヘ然共乗尻有之時ハ可

間不苦有ト云ニ若無之時ハ如此可然ト云テ即会所ヘ従立

会被言渡尤若ヘ可有被露之旨放則四月十三日之

老若ニ被寄候之処、吟味之上相ニ如此被定上ハ、以来
此旨一社一統ニ可被守之段定之処、向後座席之為例
書加候、老若之吟味之

社司氏人年来之公事、去年六月関東於江戸御
老中ゟ被得 御上意、寺社御奉行井上河内守、加
賀爪甲斐守御老中之ゟ仰下、閏五月廿七日遂裁許
則和睦被仰付、共上従 御上意金子五百両令拝領
雖有今上洛一社和睦之、就夫社司評定六役四於
氏人七月十二日被致誓状一社一同之諸事評儀
変定之神主雖久宮ニ於諸変被定候

座席ハ古法越一人之事、雖ハ二座不可苦之事
内方ケカレ之時依旧例不厭越年之服事
日荒軽服並重服之二不陽宇可勤之事
馬所ハ職役社司繋之事

先当年若衆氏人無之、仍而社司評定被改於
双雅之新法候、其ハ一日越座之儀ハ古法而越一人
ニ候之、然共雖ハ二座越不可苦之儀ト云々　二日
内方穢之事、依旧例ニ不厭越年之服之、然者
荒軽服並重服之二不寄有陽宇而可被而勤
役之吟味之、即四月十三日老若ニ被寄候仕於極ル
之旨所司岑芳中若之座へ被寄之於関東様
氏人和睦故一社ニ於読之事、競馬之馬所於ハ職
役可被繋之、先然従新宮氏神ゟ去職領ハ
之如前ニ右寺ニテ八木遣置可被渡之、但神

主典公儀之御下ニ而倭文金津之馬領可為五石
之旨馬所ノ廿一職之内解有四人倭文金津ハ神主
安志 太田祢宜土田若宮祢宜福田ハ同祝宮川奈
良祢宜淡路 同祝竹原沢田祢宜ニ被替之此時神主
雅久西祢宜誠平 祝重副 権祢宜満久 祝重栄
片岡祢宜寛久 祝重次 貴布祢祢宜起久 太田祢宜
宣直 若宮祢宜和久 祝保雅 奈良祢宜有久 祝
季周 沢田祢宜枝躬 祝清雄 氏神祢宜保可之
次出記里謡歌之説今度清邑氏金之不越勝
負樹下之儀又鎮躬ニ両将之先達雖有多

桟敷停止事

此可為眉之古例之然ニ樹下人之了簡醜後代
儀之殊称躬之違将之儀ハ諸人不意附躰悦然
之人借連庭座壁事得后嘲甚多之畢竟階
下人之謗不可有迹所之風聞戒當五日終日大
雨故神主雅久座地ナク低メ雨風右膝ニ水潦老
躰故及冷寒之色変就是對樹下庭座之所存之
在之右ト同メ論究之 次従當年馬場桟敷之事
清奉行桟敷之外一社一統ニ停止事後記可持
止者之今日公儀横目充清過箭後守久保平
兵门両所競馬見物之御上然共桟敷無之故御

所ニ畳并地走リ之岩大雨降リ長鶴丸皆ニテ
無テ見給ヘテ役人ナレト其身役人之由ニテ年
齢ハ其事ハ老人ノ申ス事ニテ給ヘ云ヘ幼少ノ其身社家
役ヲ勤ルト奇特之ト今度之事ニテ給之

装束汚有事

次当五月七日御装束ヲ持メ於庭屋而代官中ヘ
渡之古法也若有甚汚而不得干時ハ其ノ人無僻
（装束上ケ延引シ事）
日如此ト之何日迄延引申度之由無尾中ハ我内
談延申候之然ヲ当年ハ誰人之料簡為ヲ無
僻被延了ヲ無例ト云不用心ト云又ニ無尾十九人
中ヘ慮外ト云当方以外ヲ可申承之岩里老
語云新装束参之節如此雨天故延日ニ相極而
立座メ後魁又催依合而被申曰如此結構成装
束ヲ各小家ニ気並事皆も迷惑之然上ハ不
得干方ハ可延日之不得遅滞若如旧例今日可
揚渡之由也一座合首メ今日揚了

寛文六年

階下　左　主膳佑季格
　　　右　越後介氏孟

無尾中評曰去稔清邑氏金之両馬不走之独足而
着聴古今之悪法殊満里甚之嘲也然上於当年

始被頼階下後見事

ハ怠慢可糺勝負也其上對階下人而口論之儀
可恥他見之躰也仍遂評而御肝煎四人（一ノ頼也）

始雇馬出之下部事

虎頭保光清邑清弘以上次惣馬之 倭文金津除之
牘者両人従乗尻中令傭則岡本町幸松二子也
依乗尻中評而此両人ハ八木壱斗被下也皆倭文
金津可相拾也乗尻之内初乗方可被扱之治定
也

寛文七年

九番 左 左京進勇命 早大引替
右 民部大甫季純 木内落馬両手掘抜 故右負

氏縄私為去朔日奉行之舎人共事外荒奢ノ乗尻
ヲ大ニ打ノ者有之仍而従社中倫ニ奉行頭ヘ許言ハ
如此者後年乗尻人有ル為也然ハ神事懈怠也
神事為句躰者也仍被停可被下由ヲ御勘代
ヘ可許給之由也皆ニ奉行ノ頭人答曰ハ祈採也
去ル左有ハ打ノ者数人并諸奉行人迄相雑ル者
数十人然ハ為ヲ申儀也苑角而頭ハ一両輩怠慢
請合申ス重而狼藉之儀停止申付（ヘキ也）来
五日之躰ヲ御説有ル其上之許可然也恐ハ可
止ト也仍止許ナル也実ニ五日之躰ヲ見ハ諸奉行

一人モ杖ヲ不揚ノ唯支両手ヲ立テル斗之左之躰
之後年モ所致之後聞季有一人ハ負杖之由
是ハ外之者可寺ノ之世説也云々

寛文八年

四番

左 主馬佑保孝

右 因幡守鎮顕

左虚駈仍入直古迄之末場ニテ鉄取ヲ取左ニ肩
テ衛落ス其ハ御音而其ハ身モ落ル皆人曰善悪
之両説之

階下

左 織部正保味 左任例勝負決定無相違也

右 左兵衛督保光

依勇帯之評而代官保味傳曰若雨天之時ハ當
年以後ハ左右供ニ御所屋除状ル用乱緒而可着
也神事過ハ可除乱緒之云々

寛文九年

一番

左 壹岐介昌平 板倉内膳正殿御馬

右 西市正福久 吉躰之 習近例而来追白也

連日之湿雨故場内勝泥土也故皆人畏随墮落依

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

而一人而無落馬之如此之躰古今ノ希代之拈手之云々
金津之遠法之事ハ先出仕十九人目去ル不着鹿之
次勝負以後望右方之埒而見物如此新儀如何
故世説曰毒薬及引之故ハ古今ノ希代之不落
去之

寛文十年

三番
左　主税助保臺（至遅可負見吉匹）
右　右馬頭（大炊守鈞）更虎顕

四番
左　淡路守致顕
右　主殿助氏有

不馳ノ相上得絹事

依不法入直由之或人曰左下知之三番ノ匹鼓是之此
代官之誤ニ依ト無相ニテ尤之荅之故俄ニ三番之人ニ
有疑使其間一時斗之皆三番并四番料簡云々
入埒之馬ヲ不馳ノ相上テ得絹

五番
左　采女佑師顕
右　木工助氏繩
已ニテ出皆定ノコフリ不足可入直之疑故ニ言
下ニ入直ノ定匹木ヨリ出之去ル入直ニ直ニシナシトハ
右例之仍テ無別条

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』　請求記号 832-305
ガラス使用

落馬割冠額事

八番
左　左京進勇命　吉正　落馬冠額大割之
右　信乃守季芳

階下
左　民部大輔季純
右　刑部少輔季心

右當月三日霄乗尾人兼代官人堅約三遅巳メ三
登目ニ生足之由也是此公儀奉行衆救多ニ上リ
ナレハ之雖然雨天並公意之上ハ可依時宜トノ仍六
番迄ハ守約式故却遅々漸々半刻故ニ自七番

三遅モ有無ニメ馳事

三遅巳有次才ニ中式ト成而三遅モ有無ニメ馳足ト
ミミ

寛文十一年

一番
左　大炊助慶久
右　壱岐守昌平

一番左方馳以前両度落馬代浄衣着策馳事

皆左九曲之節頓宮前ニテ撤落在所ノ諸人変亂
扱及及持之期而ニ永井五内守但可謂強馬ん棹堅
ニメ直柳膝動スレハ脅ツハスル故也両度落馬仍胸ニ痛
心故難叶策駕ん皆以使者座中ヘ代浄衣着人ヲ
内談ス皆神主曰沈度ニテモ通嗚スル事ハ可被策由之
皆使答曰為古例而代浄衣人之去氏新義ニ左様之

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

義ナラシハサ止ニ痛㐬タメニライ可申トテ起席ス皆
宮内少輔保可云弥先例ナレハ浄衣着可然之料
簡之左叶例之異見云々皆浄衣人保竹於木下
而駕哉否究策故至駿之殊例策隨也馬場末ニ
テ落ラメ上馬之政又サ強ニ氣故危見云々仍例
登庿欠馬里人社家逐巻舌誉詞ス但保竹直
装束等ヲ嘲之右不零如例右為負

二番　左　西市正福久
　　　右　縫殿允保福

左福久於宮前之埒東ヘ御之右之手縄ヲノシメシエヘ起
埒而着座之前ニ馳入即落馬之右之馬モ続入去ル
不落　皆並不乗無情之嘲之　皆着座中起座メ徨徹（クハウテツ）傍ニ扱サ而左
西ヘ控（ヒカヘ）テ反メ直ニ双馳ス右荒出ストテ云ヘル教乃遅之皆負
之由右之階下ヘ使立答曰埒内ニテノ落馬スル人之勝トテ云
ノ珍シ、自ハ不可負トテ云々皆サ有所無るり

三番　左　出雲守清屋
　　　右　主税助保臺

三番左太早去ル樹下ヲサ過而落馬初乗故ん
無事ー右甚遅

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録．第10冊』　請求記号 832-305
ガラス使用

八番　左　刑部大輔佐直　持
　　　右　大監物氏金　殿ノ前ニテ人ゝ共臥負

寛文十二年

一番　左　壹岐介昌平
　　　右　西市正福久　持負如例

九曲過テ馬替事

一番永井伊賀守殿御馬黒糟毛九曲過テ頓宮
屋邊ニテ氣相ツ強ク喰テ切死スヘキ躰ニ見リ仍テ
替代ノ神事勤役

當病ノ替其座兼事

十番　左　刑部少輔季加　季加當病ニ仍左兵衛督保光其座ニテ兼之
　　　右　主斗助美氏負

神主起久　以下略之
　　　左　治部少輔作顕
階下
　　　右　雅樂頭致亂

先一社ニ新撰之旨ニテ初兼中ハ有職併従當節定
評有之先階下ノ勝負ヲ〆議テ其旨ヲ以テ従着座
所兼居方ハ菟角之有神ノ使之評之皆兼居中ト答ニ
御評使之旨畏入ヽ尚定式之儀ハ今階下中可内談ル之

由テ申入之、相四日之霄二階下来信忌火屋皆嘗式
之定於後之為ハ三番迄ハ三番目ニ出ス跡七疋ハ三遅
或巳ニテノ乗カ出馬之堅語之、若遠馳者可入直之或
遠古法時ハ乃履事
又古法之旨ニ遠有テ仁者必可致者者之、能々慎ヘ
有之由皆乗尻中堅ニ應平、仍テ向テ為乗ニ尻中
而馬者之所労而三人ヘ申頼之、先者信乃守季
芳他人之更氏書吉三郎氏　也其外喜多弘和氏
寛氏行ナントヘモ兼頼之、去ル人ニ有所頼ミ尤トテ
閣馬當年之神事勤仕致廿之趣候之旨之
寛文十三年　九月廿一日改元　為延宝元

一番　左　壹岐守昌平
　　　右　西市正福久　装束如例
俊文馬ハ公方ヨリ為名代トシテ毎年京所司代ヨリ出給
當年ハ永井伊賀守方ヨリ出候大黒毛之、當年
始馬場廣マル事
始テ馬場廣マリテ長四町余ニ成之、右之馬上ノ
御田ヨリ数万超テ北方之樹木ノハヘ口迄延テ東方之
数万馳テ帰ル当之近年ノ強キ早馬之乗尻モ達
者之後ハ大岩ノ邊ニ六人之下人大綱ヲ引馬ニ
懸テ為留時六人ノ下人ハ引作テ馳キ如右ニモ

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

左縫殿允保福

二番

右兵ア権蒲清邑

左依強馬自左代乗事

左依力強馬自左代馬古今有例

為ゞ 去巳之節左為勝

去巳ニモ落ル之 右入埒以来尻込メ聖神寺門ノ

南角ニメ棹立テ落及弛数ルメ又落ル負

五月一日 安志 右馬允保合

朱書 安志之ル於御所屋前毛付不濟由ニテ馬場埼

ニテ乗上ルヲ引下ケ毛付有之

所司代右衛門権佐

九番

左治ア丞乗直 下左

右初代石見介氏従 上右 イ右京亮

下馬メ力負事

左ゞ遅出ニ越庸証而上馬之仍庸証呼戻乗直

之時乗直思給テ乃負ト心得早速ニ下馬メ自

負惜哉愚哉

七番

左雅楽允致顕 淡路守イ 乃負居 下左

右木工助氏縄 将弛ル落 上右

先當年ハ卯月下七八日之比ヨリ始テ代栈之見所

ヲ構之故ニ永井直甚怒之辨ニテ在所之騷動

不叶之旨ニ去月四日ノ夢従社中可御宮並ハ有
職修日當年之勤責如此し然ハ今度之競ニ参
不可膝若シ乃勝又負ル而人ニ者負其口論
一切不可有之候御嗜被成也殊競馬乃手延ル
モ不可然候唯早速参ル可ニ質可然之也し仍而
自二疋メ大敗埒内ニ乱三馬し去ル七番ノ左馬入埒
并馳ニ出し候甚狼進メ良及半時右馬出ル左
ニ乃モ一二乃継之雑計ニ而立メ居候し其以後ハ共ニ
無隙ノ刻ノ内九ニ又廿急し相明ル六日依公意ニ社
家中不残出仕し

氏寅永清追放之事

清茂云此時下野守氏寅并五氏永清両人被追放
山城一国了其事詳見別記并系圖等

朱書
清茂追加
寛文十三年正月五日清今日記云鳥ニ右大路家競

始テ奈良祝職追馬被繋事

馬之馬之事ニ手前無力之由社中ニ訴訟ニ付自
當年社中ニ被差上仍奈良社祝職ニ追馬可被
繋也之然上若馬料可為他並事ニ之ニ

延宝二年

六番　左　左兵衛督保光（二人下ル）（下左）
　　　右　伯耆守格顕

右方出口楓木等ニ度落馬左方曾不出入直事

季芳云神事ヲ不分丸入走左ヨリ出口ニテ落馬
為負 右出口ト楓木之上ト二度落馬之去年左ハ
曾不出無為右可為勝ヲ見迄タル丸入走之
皆表示之右又未落ニ及之

馬出時肝煎ハマ相渡旨之事

當年若無案内人以内談テ出口之肝煎人ヲ以初
案内頼入之 其ハ仁稀季芳弘和氏行氏書四人
早速ニ出場方之前無之爲与階下之仁稀内
談ヲ以惣中并馬所ハモ此方ヨリモ菟角馬出
時ハ此肝煎ハ方ヘ可相渡之旨急度可被仰付ト
存之相案式為倭文金津可ヲ依時宜之従二番至

十番ハ三ニ達已過三疊目ニ於テ前後之馬而可出之
沙汰之依去而一番トメ無乱法左之儀之後年斯
可有之沙定也是之従社中競馬之出口近年不法之
如右法可被棄之旨云沙汰之卯月廿一日所司於
主膳正季求宿競馬組合有中老皆出羽守

初代新家仁稀ヲ初メヨリ為古法事

季山初代左ヨリ先保分与方之座席之評云初代ニ
新家仁稀初被為棄ヲ一社之古法之新棄一
無之旨以所司正人季山ハ方使其詞云老案内之初
代任法スレハ如何可存之ト答云方之兼初如何
其其人ハ尚可為見中トモ 其後自正人ハ所司ハ有

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

重発テ云其詞如先日幾撫之處ニ所司以可披露
之旨ニ席之評ニ云三度之吟味之前尾社中ハ
披露可然之由令所ハ可被許ニ依而令所申
候ス旨社司評定着帯之席ハ令披露旨一
社之義ニ於角新案ニ可有御僉其節異人
云ニ時ハ無是非老案之尻ニテモ云ニ兎角古法相
立事肝要之

延宝三年

當年モ如去年乗尻ヨリ頼云メ馬出シ肝煎
朔日之肝煎五日之乗尻方ヨリ出之五日之肝煎朔日之乗尻ヨリ出事
於之朔日之埒内之肝煎トテ以評可廿人節供
之乗尻方ヨリ出メ奉行ス又當節供ニ朔日之乗尻
方ヨリ廿人埒内之奉行出之又馬場未被啓
スルクラカケノ見物人無狼藉人亦停止之肝煎
兄人則朔日乗尻之内兄人庸顕保命保知
氏起之如すニモ人情辨之

延宝四年

一番
左　壱岐介昌平（右ニ内匠助）　四十八才
右　西市正福久（往年如例）　六十七才

五番
左　主殿助氏有
右　但馬介申顕（一飛乗）（桐本三間斗ニメ落馬左肩甚得污泥）

左　刑部少輔季加

八番

右　右兵衛尉氏従（付右京進）ト右近馬之丞尺入直故ハ左埒ニ不入ト云テ

九番

左　長門守福直（初楽）ト出口ニテ落テ勝負失乗云々

右　掃部允氏濱　上太

着座　従四位下宮内少輔

神主保可　始而神事

階下

左　正五位下治部少輔作成

右　従五位下縫殿正季求

今度御宿直之内ニ有之居故ハ福久当役ニ可否

金津諸事之勤仕為最下之事

法不職其ハ無之。仍ニ楽所中評議シ諌メ以初楽而立候ハ諸事之勤仕可為最下之由無道中往今之時可ニ留脚之由次其ハ方勝負淋テ後ニ西埒黒ハ方之見物所ニ来テ見ヨシクハキヲルル是等一之不法ハ此ニ類多有可被御嗜之ト云々近来云先之二類ハ畏而兼之後一類之西埒（出之義ハ有例ナレハ如何様ニ不ニテモ不兼之也）風也ニ是之例ト云ルハ競馬負之時中敷ニ入テ（之似テ不似一例有之也）拍五日朝当社之路中ヘ再初楽ま其詞云先日之西埒ニ見物之義ニ今ニ無同心

金津若社人ハ参不出古法之事

ヲ乱然ハ社中ヘ許申事ニテ再発云如何ニモ畏
之由故ニ其事ヲ無ク金津若ノ宮ノ競ヘ可トテ社人ハ
参不出古法者如此而後代記者也

六日依洪水不詣木船事

明六日如旧例川上之社ヘ参詣ニ赴ク旨近年無之
大雨故早ク大鼓鐘ヲ鳴メ在所騒動ナレ共詣川上之

依不詣木船於新宮前奉幣有之事

時市原橋落之由里人申故従毘沙門堂帰メ橋
南ニ神明ニテ祈メ須酒ス再於新宮前ニ而奉幣ス
旨初桒之内保朗一人申サルヽハ飯里メ於會所而夕
飯ヲ入リ仕ヘ何モ烏帽子下計ニ而出座可有由也
前ニ十九人之一老氏縄返答云今日大雨洪水ナレハ
在所可動ヘ然処ニ浄衣ニメ各会所之祝儀飯ニ而ハ
然唯無リ可然トテ再初桒一人申ル物之貴アリ
足可致ト神男ヲ以申ル三人之所作人トメ誓
詞之返答不足之義トテ氏縄ハ不同心ト云旨
道中ニ而昌平向氏縄而内談ト云ニ人曰初桒之
云分不足也去共祝儀吉ハ唯忌子屋ニテハ如何ト云

貴船祝儀之夕飯於忌子屋執行之事

氏縄答云其之ハ可之哉トテ於忌子屋執行之旨
称大雨首夜大洪水故公堤并河原辺田地大損シ別メ

依社内洪水河尾社奉遷中門内事

社内馬場之大水古今希之即河尾社ヲ精進頭ハ
桒ニ而中合メ楼門之内奉舁入中門之内ニ奉遷社

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』　請求記号 832-305
ガラス使用

了相乗尻中於忌子屋ゟ貴布祢之例飯ト号ノ祝
詞有是後代之例委細記之
員競馬神事ゟ之廳ニ着座古今之社法ト云々
延宝四年五月競馬會大雨降之神事ゟ之乗尻
於階下之座廳屋ニ着座皆右之乗尻西市正
福久不為着座仍昌平吟味ニ致古今不作法之
由被申了階下乗尻左右同意之階下所司
ヲ呼出シ曰福久退出如何不例之急度出座可有
之旨云渡之帰神人両人可被来之旨之所司
答申神人呼出中村無例申ニ付所司加和云是之
先作未ノ至之事之是例始之了参之急度
申渡ス神人兼而参之又初方より浄衣着
ニ被添露福久更清常千夜又更保尉之被參
早返答云ナ御ニ氣色悪ク而退出之事先代
未曾之放埒仁之重ゝ又可有事之仍記置了
季芳私記

延宝五年

一番
左　内匠助孟平
右　左兵衛佐定久（元鞭ゝ引不出事之）
倭文之馬所司代之戸田越前守忠継殿御馬至ゝ早

強ク御手洗川橋上ヲ越東端ニテ廿度馬許御生乃
囲所ニ入テ目留之
左右馬允保合ハ出口ニ下走而遅カ負

三番

右 雅楽助清英

七番

左 三河権守季任

季任瘧臥故代浄衣着氏
陽嫌至又代才季憲瘧ナレハ昆
知テ俄ト云其後ト元是乃勤代
為ヲ之由被仰下間之 参

右 済丞仙直

浄衣着ナラハ不苦ヨ申也

今度所司代替戸田越前守忠継殿諸事改競馬
両日之御下知未事共之 先行ヨ鞍皆具近年世

埒内雑人闌入制之事

之見事成ル調進諸人驚目殊埒内ハ諸人無御入
上下ニ与力頭両人宛肩衣袴ニテ鑓ヲ立同心十人
余棒ヲ持テ衛人故埒内ヘ一人モ不入勿論枕ニテ打
馬事共之埒内神妙之躰古今有ヨ敷躰也
次第之

延宝六年

四番

左 左兵衛督保光

右 右馬大夫晃顕

左左兵衛督保光甚強ク雖然歩行〆馬上ル之
入直之入直ノ度ハ子息鶴福大夫保宗乗ヲ

当所競馬勝負掛置候事

一、依今日記ニ延宝六年午
五月五日競馬番左兵衛尉
保光右右衛門尉虎松之
勝負虎松勝保光負
然所神主ニ階下方使
社人へ申ニ付て新知
其後掛置帳者新［illegible］
入置二年也これ有左兵
衛尉ニ右保光負
り一九是此者入ましく也
其保光ニ［illegible］
勝負之新［illegible］之儀
然之候［illegible］
其方聞届候
日日六ケ寄合神主罷
ニ疑ニ勝負て掛置金
ニ付ケ［illegible］
所存申ニ勝負之事
掛置候者ニ申也
中入事［illegible］
于時　保［illegible］
階下　右大宮［illegible］
右近［illegible］

賀茂［illegible］
［illegible］

［illegible］

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用　挟み込み物

五番

左 宗賢初代 木工権頭保詔

右 石見守氏書 上右

（飛乗違ゝ右一馬入直故落之）

當年モ又如去年三（手）之銚掛二登ゝ三登目ニ可
馬之由代当駕兎所前ゝ中与之堅諾不違ゝ見事
之中ニ五番之時サ違諾ト云（五之左）氏書大憤有馬所贈
穴氏容氏行貴所募建

延宝七年

神主保可 下略

神主与階下勝負決定之論之事

階下 左 左兵衛尉保光

右 采女正季通

當年神主与階下勝負決定之事有論去三日
晩於評議所有立合被露数多ゝ中一老競ニ勝負
之事従神主可被究之事神主直被答之皆一座
之評席新補評定関口舎言之氏侍申ゝ而云是称
数新儀之聖ゝ出ゝ神之被成着座事ハ如何有
此存知ゝ其子細兼序与之舎言氏侍云相着座ハ
勝負決定之役ゝ但御神事之供奉ゝ下被尋了

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

階下於廳屋祝義用三方論之事

神主等兇角之返答并去猪更之沙汰被仰出之
然上ハ於廳屋祝義之時両階下之三方可被仰付旨
被申出之旨季通云此義ハ自先年有其沙汰而於
御公儀改定被事又只今不謂聲事ト被申了
其外新補之社司歷々評定所免角等評義不被
申事沙汰之限之仁稀之ト社家老若之風説之
席評云先當年ハ此造営方ヘ以殊更之沙汰之
當年ハ以料皆自著座可有沙汰之以後弥ら
於吟味可然ト定則右之階下作耶ハ去ル濱以
役者ヲ伐當年ハ自著座猪更之改定沙汰可

有之可為指図ニ可被仰付之旨従三会之使之旨作耶
返云云是ハ殊ニ新役之沙汰之三百年己来在指
ノ例有之而布之ニ其例嫌ヲ作耶法令不審存
之ヲ為指ニ不法定りらる作耶右階下仕可致ト
返答ニ之右至極ノ返言之旨代官所并年寄所
為之之者雖有之之絶ニ不改定故四日之晩ヨリ
五日之朝ニ大宮馨之代官所之内四番左保別二右清喜両
人ハ五日来所故内藏頭助保方王書助氏行両人
代官所故神主ト申合右之條殊ヲ保光ヲ以之保方
ハ雑掌ノ氏行ハ沙汰人在神主之下年小氏所行

先代未聞之社法被下風聞ノ间後代為人〈并保光
ハ氏人中ニテ可為大敵ト之嘲〉為末代粗記ト
氏縄之記者之　五日階下与神主勝厚之論
者大事也　百廿餘人〈并若衆曽以無同心奈原て〉
宮𡑮ト相定一所無余日参ト氏人中申承𡑮候
被登場之内馬出ニハ中老若衆大勢相語又　両
階下之辺ニモ若衆中廿人〈余〉宛相語て及大宮𡑮〈被〉
ト申定皆之相談申也　無処ニ神主着座ヨリ勝厚之
指引〈一言モ不被申旨〉階下之下知也　後日人々ハ本主
権助季通也　其外不同拝殿　相神主庭座

左階下後見季通被勤事

ニ被登着于両階下ハ時宜有之　神主階下三人〈共ハ如先
代三方ニテ〉以料足寄之　別ニ神之両階下ニ持之　候
歩被申盃有通之大酒之　神妙之由候如此有之
事ト人々風説不少　此一段ハ季芳私記日次之旨書
加ル者也　〈ロ季通記亦詳之　乎居在階下且加指引也不見〉

延宝八年

神主保可〈下襲〉

階下

右　信濃守正五位下季芳

左　内蔵助従五位上氏侍

神事無相違執行　廿刻限遅引故奉行ヲ以廿遂

刻限遅引ニ付三遅巳ニテ番諍事

乱弁三遅巳ニテ勝負致シ於神主当年モ被着座
屋之所以判者会ノ為去年任例神主為諸下ニ
人共ニ三方ニテ以判直礼有之今度三方之事
弁神主不被着座不残之自去年一社之以条
於立合評義決定右謝着座被致了向後如此
可有之乃例書加了

延宝九年 九月廿九日改元 為天和元

定本ニテ落馬去乍早ニテ勝事

八番
左 志摩守季晃 晏乃負
右 石見介氏従 定本ニテ落去乍早勝

右八番之勝負如何ニモ左不後却而定本之下也ハ往
昔ヨリ早カリシヲ見遠而左負ノ仕来ル歟可ト
存ル所元是非力負ハ横見人誰モ如此シ
氏縄記云金津以后十九馬ハ悉皆古之大杦ヲ不
過メ留シ此大杦トハ埒廻経所之筑地南ノ際シ瑞
離之程之儀シニテ口傳

金津以后十九馬ハ悉皆経所之築地南ノ際ニテ留ル事口傳事

埒外ヘ馳出竟ニ不入埒乃負事

天和二年

六番
左 左兵衛尉氏市
右 三河権守季任 上右
左西埒外ヘ馳出メ竟ニ不埒入然ヲ為負非例之下知ト
右一馳ス至早トモ云々

十番

左　掃部允氏演　左出口ニテ落馬故力負后云々
悪馬之由也

右　主膳正季求

神主保可　下略

階下

左　豊後守刑部

右　右近将曹兼棟

朔日一人馳之時名代上古中古云例由之事

当年朔日正祢宜馬ニ但馬介申既兼テ一人馳之時
四度落テメ而モ不出故以名代保云而勤馬于時里
人皆嘲之故ハ一人馳之名代上古中古至今日無之
非例之始也加様之悪例ハ向後不再誤之義故記

神主与階下勝負之定論之事

之乎
五日競馬令出仕事外及遅引テ先栗尾方未刻
出仕ゆゑ又神主保可ハ未下刻ニお仕し皆神主より
織部正保喜ヲ以為使其言云今日之勝負自神主
雖力決定自階下被極テ然上者麁屋ハ着致
申ヲ赤下三し階下刑顕返言曰是ハ新希被作之
神主ハ頓宮之方借奉着座之役也此方ハ会釈大
鼓打ノ勝負決定之役人也自往古之如往法此方
ニ決定申テ又麁屋着座之事両之之事是ハ
貴殿心次第ト事階下返云委至極神事物之返

着之所作労之事故季芳日次之分番組ニ記之
当年所司代御替初而稲葉丹後守殿御馬出甚太
至早之御田傍ニメサセ落去ト候手之云々

天和三年

一番

左 内匠助孟平 右如例自経所北下ヲメ願退之

右 和泉守定久

一番左孟平冠損シテ不被用依期着立烏帽子事

左稲葉丹後守者前代也之而
公方様ハ名代出之孟平未小
士[illegible]ニメ撤倒故藤馬冠推メ不
被用故着立烏帽子之皆人
非例哉ト嘲云

貞享二年

八番

左 越後守季留 頓宮前落頁

右 左京允衛直

神主松下順久 下略

朔日
所司代勇致着浅沓三位起久等違乱之事

朔日
今日御所屋へ出仕之時湯屋ノ前ヨリ所司代勇
致浅沓ヲ着三位起久云是不法之旨之雨ニ乱之時
ハ各別之着下答用ト足ヲ被申勇致不着有子細
哉如何ト不申入着用之 扨於御所屋着座之時

御所屋畳布様同違乱之事

畳之布様尋之可敷並之旨申三位雅久起久
違乱以之外之 然共勇致不申入着座之 其節季芳

代々ノ見並行キ其家儀申ト云是ハ以前之事也
着座致シテ其後ハ不起者今日之故実也故古今ノ
無例ト申皆起之人覧物ヲ被了雖然起之人申分非
儀故申分不起其外ニ相済之其躰見苦布候
子息修理大夫雄平見致居同座ニテ退散也
加様之事ハ以後代書加ヘテ後世ニ於テ下順之人不
謂旅中出無例事沙汰之限リ也然ルニ中ニモ
今日順久モ不為ニ庭座着座ニ不法之也

貞享三年

保朗三日ニ軽服ニ成保知替其ノ座来事

声掛ルト逆馬場ニ馳ヲ居負事

五番

左 木工助保朗 下左 二座下
右 左京亮氏帯 負
保朗三日ニ軽服ニ成故ニ縫殿允保知替来之

六番

左 越中守兄弘
右 兵部権少輔季有 上左
兄顕ハ馬暴不出殊ニ声掛ト逆馬場ニ馳ヲ居負

十番

左 左馬允術直
右 縫殿助氏容 出口ニテ落負

着座
神主森右京権大夫維久 ニナル 当年改維久ハ 以下略
内蔵助 所司法顕

左織部佑保純代官之後見季芳

階下　右主計助季康代両人競馬猶須沙定

之候氏容致名之義不相ノ后伴スレハナヤミノ由申之

ト云々依之ト加之由也

當年五日乗尻之務事雑服ニ成以名代可乗

哉否事

依為輕服之家陰陽大夫不立被候事

今度来之久保朗三日之朝從父讒果雑服之雖無

其沙汰名代ヲ立可乗ト權祝二男童達此時無足之輩

為致於別火ヲ了陰陽大夫宗村之於雑服之家

被被立タル例不兼候トテ退出而不立云々甚以憚之

皆手中ハ由モ無之之及暮而童達参籠之座ニ参

出而兎角無謂而押テ被給別火了于時乗尻流

邂逅云子細如何童達返言不分明之其時乗尻致衆評

初参之仁清喜申所以両人所司大夫法顕ハ使ヲ立

彼子細尋了法厳返答云此方ハ何之由無之故不

存由返答之　初参此方流中ハ被寄之　仍而乗尻中

正躰之仁輕服ニテ以名代乗事自往古例無之旨之事

立腹返返所司大夫ハ返答云正躰之仁輕服ニテ以名

代乗ル例自往古無之事也　返牒座席流之寄

會被催サス吟味ノ乗尻中ハ堅致ス事ト

存之トテ　已ニ及刻ニ及テ法厳以申ト有返答而

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録．第10冊』　請求記号 832-305

ガラス使用

早速法親座席ニ寄合被致右之使ニ々通被為
有之清番李芳清令之皆及評議清番云是ハ
只今成何共難決定事之料簡可然哉ニ々其刻
又従六当衆中若役ニ指添加茂史語云保朝ハ狂
非被棄儀為ト存之内手中ハ当座ヲ免粗忽ノ継
申処ニ其例無之ヲ初ニ破哉事ヲ中之難ニ而
無之棄苑指揺可申之只今之儀ニ而当上下ニ
不限料簡ヲ以其座ニ而被棄可然之旨許言而
已来之例ニ成者也之皆一座之評云是充之
後之此上ハ席中之料簡不叶事之幸今夜

有立会之間可被尋内意ト所司ヲ以立会ハ被為
之其返答云座席之吟味至極之是ハ例事之免
角古法不被損ニ可然ト存之ト返答之其間ニ又従
六当苑棄苑方ハ右之通座之又従手中ヲ座之旨
所司法親ハ以初棄告来而云源緑之名代弥
成者也ん手中分モ又条範ハ座方之ト云々皆席
衆モ右様之儀ト返答被又其手組ハモ源緑之名
代従古来無之殊此競馬者晴之神事之如此
不法成者歟ト席中決定セラレ手中ヘモ其返言
之已来不加様之儀論無之様ニ并文有之ヘキト

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』　請求記号 832-305

ガラス使用

三番　左　但馬守清常 下左
　　　右　伊豆守保廉

三番ノ左但馬守清常出仕ノ時門外ニテ落馬ス
源大夫依為浄衣着用習禁雖然出仕以前兼宛
中階下ヘ一会之届ケモ無之左様麁屋穿候テハ
神事也ハ如何ニ重テ吟味ヲ勤番ニテ競テ相済
後日ニ但馬守源大夫ニ無之難存シ出仕以前
届ケナキ故之

出仕之時俄ニ名代兼浄衣着無届故三ケ年之ヲ難辨シ事

め年 難心

元禄三年

古法三座之外無之事以料労保允八人兼事

一番右 左馬助保種　　二〻左 右京進保白 初
三〻左 縫殿大允保廣　　四〻左 右馬允保合
五〻左 主税允保長　　六〻左 木工助保朗
七〻左 宮松大夫保格　　八〻左 能登守保玄

右保允八人古法ハ三座之外者無之之例ニ依此
兼宛ニ座席ヨリ以使保八番迄下ル事如何雖
然不苦之返答之餘ニ兼宛無之左以料労如此
重而之例ニハ成ヌ間敷者也

右競馬記自元和元年至明暦元年者忱直（迨直男也明暦元年十二廿一卒年五十四）記之自明暦二年至元禄三年者
忱直長男従五位下隆直（元禄六年八十二卒年五十一）以従四位下
季芳所持之本所被書續也仍件忱直自筆
之本今ニ益顕三男直虎分支巨覧所持ス乃予
懇望令書写了但明暦二年以後競馬勝負並
例等之記事文理頗雖不分明姑以本紙所写
留也

右京権大夫賀茂清茂

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

右者以經國家之競馬記抜之者也

文政四年巳年夏

従四位上行肥前守経千

競馬異例

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』　請求記号 832-305

ガラス使用

五月朔日五日競馬

元禄十四年

朔日　倭文　繁蔵允保知　代無足季国

（兼兒奉幣晴階下ニ奉幣雨ハ無之事）

元禄十五年

五日　今日兼兒奉幣之節ハ雨休スル故如晴於庭上有奉幣　階下奉幣之時ハ雨下之間入屏中門於祝詞屋有奉幣

（朔日晉今兼帯事）

元禄十六年

朔日　土田　権祢宜晉此庄ニ兼　吉鶴大夫氏晃

権祢宜　土田ト晉此所ニ兼　左吉大夫清也

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』　請求記号 832-305

ガラス使用

同上

宝永元年 三月十三日改元 為宝永元

朔日 竹原 貴布祢祝卜部兼 三位大夫季陳

正祝 権祝卜部兼 福松大夫重達

権祝 正祝卜部兼 久馬大夫氏松

貴布祢祝 竹原卜部兼 友吉大夫清也

寶永二年

朔日 出雲 御馬所 松下家

竹原 御馬所 沢田祢宜弘増

貴布祢祝 御馬所 新宮祢宜清雄

新宮祢宜 御馬所 沢田祝兼林

木船祝者閑職也依之件馬立于新宮祢宜清雄

許 脛長御馬者雖為松下家之馬自去年依被

為上于一社中立于若宮祢宜之許斗然間新宮

祢宜職之馬者被立于沢田祝之許者也

五日

九番

左 正祢宜 木工権助氏條 負

右 片岡祢宜 志摩守季晃

馬主右擲兼九損冠事

今日競馬神事次第諸事如例 但正祢宜之馬兼虎

木工権助氏條九番之左負也 然処件馬之梅ケ辻町

六字染 岡本宮内少輔代々之被官也 散了 今立腰不障神事

之場而色々及雜談剃氏僚下向之刻待受于岸
町之角臣有軍々及過言依之氏僚不得止以鞭
拂之処却而執杖而相向冠木令破却早氏僚雖
有存旨依為神事警衆之體不任其意之処
近邊之者出向引退氏僚於六条者追付于私
宅早六条始末不憚神事為土民之身及慮
外之旨言語道断不可説之儀也依之自氏僚も
而令破却之冠於馬所訴申件子細並及一社之
沙汰早而無異論者也
氏僚陶宅之後以鹿市丞保賞聊之高丞氏壽

兩使出而令破却之冠於馬所西林寺保喬詞子
細具申達之処内府返答云保喬于今馬場へ
罷出居右之趣承届候陶宅之節可申付
候於冠者先以不令持陶之方再往雖請申候共
候様無兩使退出了
次以鹿市丞保寅三七丞季麻兩使申遣于初棗
中将左右階下之詳早承届之旨有返答
後刻從宮内少輔保喬許為使右近將監由致
來入口状云先刻頗仰候ハ於馬場之儀申者
是以依無常被仰出之通承致遣候則冠

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

破却之様子ニ被一覧候ハヽ誠以言語道断之始末
驚入候ニ付然ル所役宥罷外ニ付座等其外之穏
便ニ相済候様得と相考候処則冠等被返進候旨
氏人ヘ返答云此後既申達候ニ初参中并社下等
之評議無之上者以一分之料簡穏便ニ難相斗之旨
及返答之間由頭退去了
入夜如例年新元服廿人各参集于時自初参中
氏人役申達趣有之被露依之各遂吟味之処右
并相違無之間無之上者云々右旁以穏便ニ難
相斗候旨一決則以差使守成貞ニ返答並様

両人被申達候件趣於會合之候許一社中参
會之上被露之候処右返答云
委細承候再来七日寄會之上可遂披露
候也然於自新元服中ハ口状書被申入可然之旨返
六日晴 今日如例年新元服中各参集于太
田社之過自是参詣于末社 路次之社ニ奉幣 如例右於梅宮社
神酒者備進 各頂戴了 御酒者備進奉幣了次神酒
頂戴之 次自惣市依例被出粽 三方於新元服
中次参詣于奥御前 神酒着備進奉幣了
次各方饗応如例 其後各下向帰

給於市原芝（昆沙門堂之後）幡枝之芝（八幡右馬之允）深泥
池池側太田芝等有祝儀之献如例並年々各
祝萬歳退散
今日自八番氏中ハ岩佐（出羽守 致直）被申入于志摩守
季昆許（季昆者依為氏僚姉聟也）趣者氏僚儀此度従八番氏
中無執申之処（右京進保匡雖為八番氏之氏人衆氏断 仍而之自八番氏御番氏衆氏僚之出）
故也 異乱出来候ハヽ氣毒存候 然共右此儀穏便ニ可被
差置候哉 又ハ可被遂吟味候哉否承度存候之
旨也 返答云委細承届候 此義宿老被申達
于氏人中並階下等之許之処 猶以被遂吟味

可被遂于一社中之儀由及返答之
七日晴 今日自氏僚被持出口状書於初衆中
係云 成員之許
萬精
口上之覚
今度五日之競馬馬前ニ孫吉之馬為私肩申候
ニ付諸人之前ニ而一言之六ケ敷々悪口申候儀
人々私も難儀成存候而猶更大事之儀申ニ付
ニ存候ニ付所存之場ニ而山本河之角為大
勢待受又悪口申掛候ハヽ迷惑仕難
ニ而拂申候ハ難ニ而申 散々ニ申掛仕冠ニ申

擬之申付権禰宜女房衆と我々家之内に引入
申候此後とても宮中に而茂見合候ニ付
申度候事

宝永二年酉五月七日　山本左京権助印

社家之流中

此日擬議而家流中名寄合社家中被為談
合氏僕能被申達候得者寄合ニ付其上今日社
家中ニ口上書被指出候ニ付被遂吟味之上可
被申達ニ一社中就居之候也依之各一同遂
吟味之処右口上書之趣依無相違添被申

達候一社可然候一段則右日氏僕被差出候
口上書之文自家流中別之相除通帰刻
以咸貝着精為左被申達候所之儀許
可返答云口上書被為学ニ追而可遂披露
候也依之各退出候　先是自八幡流
伏答役致直来入口状云今般　本主権助
自八幡流者共ニ一社ニ相違申候ニ自家流中
者共ニ而有之候也　返答云自家流中茂
候口書共可指出候段被申候ニ自八幡流も以
書付被申達候哉否之候相尋之処　以口上

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

中大史也
自業院中被指出于一社中除状
　　江戸之覚
九番之競馬東左権助被勤候處之勝負有之
候并馬之六条揃之處白中其上戴之赤鞭
付候處東左権助より業院中江書付を以
差出候沙汰候之處ニ付きて以業ケ様之事
由来候得共は何様ニ而雑勤候得共此後何も有之
之候并ニ様之致等可令
　一月十九日七日
　　　　　業院中

馬之對業院及慮外遂刀祢職之召放事
沙汰人中
及晩景自一社中右件沙汰人大膳権亮季之
来入于若狭守成貞許口状云先剋自業院中
被指出候口状書及披露之間則隠之被遂
吟味之処六条衆罪科依難遁也評儀有之
既雖及追放之沙汰候此段者於一社之沙汰
再応難被申候旁以被宥免一等被者
刀祢職被召放候此段各承知可被成候也
返答云承候ニ於其趣可申達于業院中候也之
八日晴於藩所業院中方寄合一社返答之

趣被寄方々へ令承知之上置刻ニ而仲間之礼
以成員並精勤与被遣ニ令承之候許事称
来ル
右今度之一件始終之趣聊不紛事実詳ニ而記
之也尤此後先ん須於社司中及評議之処ニ為
初業中可被記置之旨一変同茲成員並通代
並精氏市代保玄等兼合則肝要並祢并
執筆清茂等相加巨細記之畢於向後若永
而初業中ゝ此後年ゝ毛急勝競ニ而相勤
勤仕之次第并其例等令可被書加于紙

尾者依究評而定記之件

同年八月七日有寄会田中町六之作而敦申
者去五月對御業成候ゝ就者思外不調法仕
候御立腹之段而尤ニ奉存迷惑至極後悔
仕ル今ニ蒙厚免且御一社ニ茂可然頼
御執達乃祢議之處猶於被返附者生ゝ世ゝ
難有厚可奉存之旨此日自初業中ニ而
被寄来也　評去六兵衛儀実方八書成之
業之成中相談之上ニ而達于一社中紀明有

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』　請求記号 832-305
ガラス使用

之處罷神事依不怪雖可被處于追放一社中
被加宥恕已被免一等猶被召放其職令不了
然者今度社家中更被執達于一社之理可
有之者欲継雖有何分之評議社家中執達
之而無用旨一決了

宝永三年三月十八日有寄會田中町六条
殿之館此日又及披露依去年八月祝評
之上自更無寛宥之評議向後社家中執
達堅可為無用旨被申渡于社家中了

落馬冠破損ニより

宝永三年
五日

三番
左 宮川 縫殿大允保處 勝
右 出雲 内藏頭清文
勝負未以前而落馬冠破損

四番
左 片岡祝 右馬允保合
勝負未以前而落馬
右 新宮禰宜 兵庫助従顕 勝

十番
左 權禰宜 大学頭勇長
出口於櫻木下落馬
右 貴布祢禰宜 民部丞季根 勝

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

寶永四年
朔日 倭文 御馬所神主 御馬一毛一寸 就父 所司代松平紀伊守信兹
五日
二番 左福田 内膳正重粒
右西池 初案 但馬守清常
所司代依忌中ニ付御馬被出候ニ付憚哉否御尋之事
一同年四月下旬所司代松平紀伊守殿奥方
逝去也忌中之間御馬参因等被出之事可
有憚哉否社例可令注進之旨被仰下于一
社一社注進云自前日潔斎別家ニ被揖置不
及表御馬参因被出之不苦由之因茲任
社家注進之旨以例被出之其注進之文案ニ委
細在社中日記 右委在之記之了
初案清因一日軽服ニ成依之清常初案替被策事
一當年内匠允清因初案ニ当リ被立代之処五月
一日妹善子 母氏異 卒去也仍而告ニ於所司廷
許及晩座席宛有余會萬ニ雖被立代忌
之人被策之儀無例之候之但馬守清常
清因明年初案一ノ被勤之事
初案被相勤之清因者明年初案可被勤
之但条宗之被相済之後故障之儀在先
例方之不苦其段策事之

御所司忌中御馬出事

宝永四年四月廿四日此日自御所司松平紀伊守許
家来菅沼文左衛門当神主冨野三位能久亭ニ云一
昨廿二日紀伊守内室卒去ニ而忌中也御息方五
旬服然者競馬神事ニ馬警固如之事如何先
例有之哉子細可令注進旨也即時有寄合
考先例同廿五日一社惣代神主冨野三位
能久新宰岡本織部氏訖両人参于御所司
昨日申尋之旨先例以口状書注進之

口状

今度紀伊守様御服ニ付競馬御馬御警固御出
しはゝかられ候様子御尋被遊候前々も御人数御馬
警固之御完潔斎被為仰付御番ニ而候此
度も其通ニ而御座候近来貞享三寅年土屋
相模守様御服之時右之通ニ御出し被遊候其
前も先例御尋被遊候ニ付稲葉丹後守様五
味備前守様御服中ニも潔斎ニ而御出し被成候
通申上候以上

四月廿五日

上賀茂社家惣代

岡本織部

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』　請求記号 832-305
ガラス使用

神主三位下

宛所無之

右持参之処能登守申ニ付脈とハ柿子而
替ニ付差出候ニ而被尋問之有脈并共ニ同様
ニ付其由ニ候仍而件之書付被返候然ル処中乃様義ん
上ニ但当町奉行安藤駿河守中根摂津守
江当用ニ付右之子細御届申入ニ付
同廿七日従町奉行中根摂津守許賀茂社家
惣代依相願判形被候之処ニ尋候ニ付以書付被

写之見于左

覚

一来ル五月朔日足揃同五日競馬右警固能登守様
方清家来并北組惣出仕潔斎被仰付有之
者不苦候也

未地穢一切無之候ニ付不苦候哉

一競馬例年明廿八日ゟ賀茂川ニ而清メ被仰付候

右同断

一土屋相模守様稲葉丹後守様五味備前守様ニ而
脈中警固被勤候也先例有之也

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

軽服ニ而有之候哉重服ニ而も不苦候哉
右之類御服之軽重ニ而有之候其余之例書有
之も有之候ハヽ紀伊守様御服忌右様之未
地穢も一向無之候ニ付潔斎被仰付候得共猶亦無
障之上日取形ニ而書付一通ノ様持出候事

亥四月廿七日

依件頭帰刻一社有無会評議之上返答之
頭書付持参之上其案如左

依御尋口状

一来ル五月朔日足揃同五日競馬右清祓御園近
紀伊守様清祓組并御家来御出ニ被成候ハヽ潔斎
之儀被仰付候得共不苦候哉御申上候定而地穢ニ被
混居候存候而御申上候得共被混地穢候ハヽ御憚
有之儀ニ奉存候

一御競馬明廿八日より賀茂川ニ而御清メ之儀被仰付
候由是も右之通被觸地穢候ハヽ御憚被存候
義ニ奉存候

此処張札ニ 外ノ御屋敷ニ被成候而御流ニ出候は地
穢ニ而候

一土屋相模守様貞享三寅年清祓被為遊去

者ハ宜服ニ而御座候由ニ候　稲葉丹後守様ハ
息女様御逝去ニ付此日鈍書面相勤申候　五味備
前守様御服之義ハ相合と申面ニ相勤申候

亥四月十七日　同

上賀茂社家惣代　西池主善印

林宮内権大輔印

御奉行所

右書付持参之処ニ別紙被渡当座之後此旨
紀伊守殿武家伝奏衆　柳原前大納言資廉
高野前中納言保春　江被差
入白河殿ヘ地様之子細被尋ニ付右社家
家ニ而差出候由之書（十五日　十七日）等も被附送由ニ
因茲同十八日白川殿返答之趣書付一通
ニ而右則御両伝奏江差上候　紀伊守殿許江
其書付見于左　此書付ハ社中日記ニハ不詳也私ニ所
記写置之

以上覚

一松平紀伊守殿被混雑ニ付　賀茂足揃
競馬之人馬被相加候事　若ニ相見候ハ
尋ニ顕被成候

一地様混合之人馬ハ此方ニ而伝揮之儀ニ付申
論様者甲乙丙三段近増ニ候　路合有之候

右於警固前々之

一 能保守殿人馬之儀も別て座敷ニ而有之候而諸合

之事ニ候へハ若狭守殿へ申入候以上

四月十四日　　雅文

柳原前大納言殿

高野前中納言殿

所司代忌中御馬御警固等如例年被出事

於九日早天社家惣代両人參于中根攝津守許

競馬人馬之事如何可被成哉承度之処被申

候ハ能保守殿人馬別て座敷之儀指図

様を可被指出候ニ而其外万事如例年可被成之由依之

朔日五日両度共不異例年競馬并警固等

被出之神事無滞相済了

宝永五年

五日

二番　左 出雲　縫殿允保知　勝於末落馬

右 正祢宜　但馬守清常 落弓

宝永六年

朔日　正祝 御馬所 重豊　千代松大夫清親

貴布祢 宜 御馬所 重元　千代鶴大夫均顕 落弓

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

五日

九番　左正祝

右貴布祢宜

初策 造酒佑季秋　於出口蹴合落馬入直

先 周幡守勇精　持

一当年足揃之所、正祝兼尾清親、貴布祢之宜

兼尾均顕之、此者九番ニ被組合之処、双方小振

三之遅巴雖成、均顕落馬候ニ付、去二日ニ五日

之兼尾中右方之者一疋之替候之所

貴布祢之宜許ゟ雖被申入、再往之断ニ付、其

分ニ而被差置、同五日九番之馬蹴合季秋

遁之ニ落馬候ニ付、兼尾中ゟ兼宅雖頼、後日ニ而

馬所ゟ差事成馬ヲ被出候之事

以後之為先例、通社中ゟ申達、以後者無之所、差

事成之所被出之候、自社中沙汰有之、此振ニ

以一通申達之処無之事

五月十二日　右之通以一通一社中ゟ申達、其案

口上覚

一五月朔日足揃馬所正祝童豊兼尾千代松丸

清親、貴布祢之宜童元兼尾千代鶴丸均顕

被相勤、此者九番ニ被組合之処ニ、双方小振三

遅巴雖成、均顕落馬致候ニ付、翌二日之朝

五日之兼尾中ゟ右之者一疋之替物乞、童粒季國

至以右方之馬一の番給之者中ニ而又々外ニ只今勢申中
迷惑之存候得共其備被為勤候様ニ氏人中ニ
而我等之取存し申候重元迄尋ニ候処ニ付
一同二日初乗季秋方ニ彼方ゟ社中ヘ入候而其番
而中ニ之殿前ニ而入候通何とも其備ニの被相
勤候様ニ申候得共不申候処其後入重粗一理取当
仕候以又申入候者得共返答ニ不及候得共大
事之候祈事ニ候得共何とも右方之者一定
之番組之者中ヘ申付処重元息女病気危
急ニ而取込候得共其備被為勤之の様之の旨候
断有之候得共不是非先其通ニ而為相勤申候
事
一五日九番之者尤季秋右無精為勤候処ニ
何も御覧之通悪馬故季秋落申候依之指
貫破損いたし其上重し候て御神事差
及遅々候段氏人中迷惑存候而以後左様之
無之所ニ御神事後申候様ニ御一社中宜敷
被仰付被下候已上
宝永六己丑年五月十二日　五日之氏人中
御一社中

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第10冊』 請求記号 832-305
ガラス使用